
董色の麒麟児

在前直太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

董色の麒麟児

【Nコード】

N8845T

【作者名】

在前直太郎

【あらすじ】

ありがちなタイムスリップ（過去に）。ありがちなチートヒロイン（自称）。ありがちな国盗り物語（の予定）。ただひとつありがちじゃないのは、超非常識男とタッグを組んで日ノ本を救うことでした。歴史の「れ」の字も知らない小学生のまま過去世界にトリップした女の子が、定められた歴史に則り激動の時代を駆け抜けていく…わきゃねーだろ！　どうなるんだよ、おい！？　史実捏造歴史大河、ここに開幕！！　●この物語はフィクションです。あらかじめご了承ください。●9/14　ユニーク1000とその4倍近いP

V記録しました！！ ポイントが伸び悩んでいた最中だったので男
泣き（？）しそつになりました！！ 本当にありがとうございます
！！

董色の麒麟児（前書き）

作者からのお願い

あらすじにも書いたとおり、本作は歴史をロクに知らないままタイムスリップしちゃった主人公のお話です。なので歴史解釈は主人公の主観に全力でおんぶします。

ありがちに歴史上の人物も数多く登場しますが、アンチの多い人物をヨイシヨしたり、歴史的英雄をフルボッコにすることもありますが、ご了承ください。

言わずもがなで史実崩壊、キャラ崩壊はフツーに頻発します。

以上の点から考えて、読者様を不快にさせることも多いと思われると思います。お手数ですが「こんなこと書かないで欲しいな…」という意見がございましたら是非お声を聞かせて下さい。できる限りの対処をした上で、今後の参考にさせて頂きます（お気に入り登録から削除した場合も、気に入らない点を明記して頂けたら嬉しいです）。

長々と失礼しました。それでは、本作を最後までお楽しみ下さい。

在前でした。

董色の麒麟児

すでに日付は変わっていたかもしれないけど、ハッキリ言ってそんなのどうでもいい。

薄れゆく意識の中、窓の外で雨がザーザー降っているのを聞きながら、わたしは五感を手放した。

(…薬が効いてきたかな…)

…今夜かぎりで、わたしは命を天に返す。

死にたかったわけじゃないけれど、ただ、ただ疲れたのだ。

明日の見えない世の中で、何を信じて生きるべきなのか探すことに。

まあ、たった11年で自ら命を手放すなんて、端から見たらただのバカだろうけど。

…バカって何だよ、こっちはそれだけ必死だったんだぞ。

努力も才能も関係ない、人の好みひとつで運命なんてコロコロ変わる。そんな世界で誰にでも好かれるよう、綱渡りして。だってそうじゃないと生きられなかったから。

だから、死を選んだ。

この世界に完全に染まってしまっ前に。

最期の最後だけは“己”であることと引き換えに。

…ああ、もうどうでもいいや。

どうせもうすぐ全部終わるんだから。

雨が音をたてて降り続けている。

この雨音はこの世のものか、あの世のものなのか…どっちかな…
……。

……。
……。
……。

え？

「お、起きたか。おはようさん」

「！！！？！？」

…雨降るあの世では、和服姿のおにーさんがわたしの顔を覗きこんでいた…。

もんのすごい、間近で。

「え？　ちょっ、うわっ！？」

思わず突き飛ばすと、おにーさんは小気味いくらい大袈裟にひっくり返った。しばらく馬鹿みたいに仰向けに伸びていたが、むっくり起き上がるとそれでもやはりニカッと笑いかけてくる。

…笑いかけてくる？

誰に向かって？

「なーんだ、全ッ然元気じゃねエか」

「だ、誰ですかあなた…！？」

訊いた瞬間、おにーさん、目が点。いや、死語なのは分かってるけど。

盛大な溜め息のあと、拳で頭をぶん殴られた。文字通りぶん殴られ

た。コッソなんて生半可なものじゃなくて、もっとう、ゴーンと。

「…痛つ…たあ…何するんですか！」

「誰だか訊きてエのはこつちだバアカ。この雨ンなか他人ン家の前に転がってたのを、わざわざ拾ってやったんだぞ？　しかも」

おにーさんは無造作に広げて干してある、私の洋服を指差した。

「西洋の服なんか着ておいてヨ。まったく、どうせ助けを求めンなら場所を選んでダな…」

「誰も助けてくれとは言つてません。あと拾ったとか恩着せがましく言わないでもらえますか？　あなたに拾われたのは不本意ですし、わたしは捨て犬じゃないんです！」

最後の一文だけわざとゆっくり言つてやる。すると、おにーさんは真っ青になって飛び退いた。

…え？　なに？　わたし、そんな怯えるようなこと言った？？

「…い」

「い？」

「犬はやめろ！　犬は！！　いいか、ここにいる間は、二度と俺の前で“犬”つてエ単語を出すなよ！？　いいな、金輪際だからなッ
！！」

「…なんでですか」

「なんででもだ！」

おにーさん、冷や汗ダラダラです。しょうがない。その必死の形相に免じて言わないでおいてやろう。

にしても、よほど犬が嫌いなんだな。この人は。後でこの家の人に
なんで犬嫌いなのか訊いてみようつと。

…ここまで考えてようやく気付いた。

目覚めたのは和室に敷かれた布団の上。畳の匂いがなぜか懐かしい。
お世辞にもふかふかとは言い難い布団にくるまって、わたしは着物
姿で寝ていたようだ。…そして、目の前に座るこのおにーさんも和
服。

…あの世って、こんなに純和風な世界なの？

あ、そうだ。ここが天国なのか地獄なのか訊いてみよう。

「あの、つかぬことをお訊きしますが、ここはどこですか？」

おにーさんはまたもや目を点にした。

「ここは本所だ。亀沢町にある男谷家」

…本所…亀沢町？ 東京の地名がなぜあの世にも？

いやそれより、このおにーさんは男谷っていうのか。赤の他人の家
で行き倒れを介抱するなんて考えづらいもんね。てか、死後の世界

は名前まで純和風だなあ。

「それで、あなたはどのような立場の方なんでしょうか」

いわゆる天使とか悪魔とか、そういった類いで。

すると、おにーさんは少し考え込んでから答える。

「えーッと、ちイっと前に家督を相続したばかりだな」

…家督を継いだ？ それ、後継ぎだってことだよな。こんな若い人が？

だってまだ高校生くらいに見えるよ！？

まじまじと見つめていると、彼は人を食ったような笑みを閃かせた。

「アナタなんてこッ恥ずかしい呼び方はよさねエか？ お嬢ちゃんよ」

「おじよ…！？」

失礼な、と思っただが、明らかに相手の方が年上なので黙つといた。屈辱。

「ええと、じゃあ…」

「りん太郎。りん太でいいぞ」

そう言っただけで胸を張るけど、残念ながら先程と違って漢字が

出てこない。林太郎なら森鷗外だし、倫太郎なら警視庁捜査一課だ。しかしどの漢字を当て嵌めても、おにーさんのイメージにはそぐわなかった。

もう面倒臭いからカタカナでいいよね？ リン太郎、本人の希望通りに略すならリン太。よし、これでいこう。

「で、お前エさん、名前は？」

リン太さんは興味津々に訊いてくる。死後の世界では身元確認は必至ですか。

無遠慮に訊かれたことがなんとなく癪に障って、わたしは少しだけ意地悪することにした。

「…え…でも…」

「でも、なんだ？」

「…本当に言っちゃってもいいんですか？」

「このまま名前ナシで呼べるワケねエだろが」

食い付いてくるリン太さん。

しょうがない。わたしは出来る限り小さな声で言った。

「…？ …んだよ。小さすぎて聞こえねえっつーの！ ハッキリ言えハッキリ」

そう言われたら、ボリュームを上げるしかないよね？

わたしはぎこちない笑顔をつくって偽名を名乗る。

「犬、村と申します」

「.....」

「.....」

「.....」

「.....」

「.....ぎ」

「ぎっ」

ぎゃあああああつつつ！！

と断末魔にも似た叫び声を残して、リン太おにーさんは部屋を飛び出てしまった。

そこまで犬が嫌いなのか、アンタ。なんか悪いことしちゃったな。

(…って、あゝなんかゴチャゴチャ言い合ってたら気分悪くなってきた

た…)

きつと薬がまだ残っていたのだろう。死んだのか？ まあいいや。

とりあえずリン太さんはまだ帰ってきそうにないので、誰か来るまでと再び石みたいな枕に頭を預けたのだった。

リン太さんがガクブルしながら部屋に戻ってきたのは、たっぷり丸1日経った翌朝になってからのこと。

ムラサキじゃなくてサキだよ！

息を整えてようやく落ち着きを取り戻したリン太から、わたしは“ここ”の話をあらかた聞いておくことにした。

死後の世界の滞在期間はどれくらいのものなのか…一時的なものか半永久的なのか分からないけど…とりあえず現状を知っておいて損はないと思ったから。

が。

「死後の世界って！…ハア。お前な、勝手に俺を殺すな。まだこの通りピンピンしてるッての！」

どうやらここは、一生を終えた魂が向かうべき場所ではないようだ。

じゃあココはドコなんデスカ！？

「だから何度も言ってるだが。ここは本所亀沢町」

話を聞いたところによると、こういうことらしい。

ここは地名で言うところの江戸本所亀沢町で、ザックリいえば武州、もつとざく切りすれば日本にあたる。わたしはそこで雨の中倒れており、たまたま通りかかったリン太に発見され、ここ男谷家に運ばれたのだとか。

つまりこの話が正しいとすれば、わたしは空間ではなく時空を、それも魂だけでなく肉体ごとトリップしたことになる…！

「へー、んなコトもあるモンなんだなー」

「わたしは自分で結論を出しといて、まだ信じられませんが」

なんだかよく分からないが、わたしは死ねずに生き延びてしまったというわけか。

…冗談じゃない。ようやく全てを放り出して、ずっと眠っていられると思ったのに。

「ま、細けエコトはどうでもいいっか。それよか、腹具合はどうだ？ お前エさん、一日中寝てたしな。粥あるけど食う？」

どーでもいい？

その、あっけらかんとした口調にわたしは違和感を覚えた。目の前にはおそらく…武州は昔の埼玉・東京の地名だと聞いたことあるから…未来から来た人間がいるというのに。

「…それだけですか？」

「？ なにがだ」

「ですから…未来人にこれから何がどうなるとか、先の事とか訊かないのかなあって…」

だいたい現代人がg o t o 過去する話だと、当時を生きる人が未来の事を訊きたがるものだ。たしか昔読んだ児童書がそうだった。しかしリン太は。

「ベツに？ これから先のコト訊こうが訊くまいが、どーせなるようにしかなんねエだろ」

「そんなことないですよ。わたしの出方によっては日本が、ひいては世界の行方が怪しいものなんですから」

「その時はその時じゃね？ 誰がどう足掻こうと必要なものは棄てられるし、必要なものは残る。それが世の中ってモンだからな」

「……………」

わたしの啞然とした態度に気付いてか気付かずか、粥よそってくる、とだけ言い残して部屋を出ていった。

… 必要なものは棄てられるし、必要なものは残る…。

リン太の言葉がなぜか引つ掛かる。

それがもし本当なら、わたしは必要とされて生き残り、こうして過去世界に飛ばされたということ？

でも… なんのために…。

「なぐにガキンちよがムズかしー顔して考え込んでんだよ。ほれ、粥。持ってきてやったぞ」

リン太がお椀と匙を持ってニツと笑っている。

わたしはそれから目を逸らした。食べるということは、生きたいと願うも同然だ。自ら死を選んだ以上、何の権利があって食べることができよう。

食べなければいずれ死ねるのに。

「ん？　なんだ。あーんして貰いてエのか？　やっぱ見た目どおりのガキだなア。しゃーねエ病み上がりだから特別にな」

「そんなわけあるかーっ！！　いつわたしが食べさせろって言ったのさ！…頂きますッ！！」

こちらの葛藤など察しやしないリン太からお椀を引たくって、わたしはたったコンマ数秒で生きる方を選んだ。バカじゃないのかコイツ。

匙で中身を探れば、お粥というよりほとんどお湯だった。口に含めば申し訳程度に塩味がするだけ。

「あ、そうそう。お前エさん、名前ミムラサキだったよな。お前エさんの字、どーゆーモンだって親は言ってた？」

「……………は？」

一瞬、何を訊かれたのか分からなかったが、リン太が筆を取り出したことで意味を悟った。

つまりリン太はわたしが、自分の名前の漢字も知らない人間だと思
っているのだ…！

いつもなら無視するのがわたしの常套手段だが、コイツにバカだと思
われるのも癪なので、筆を奪い取ると字を書きなぐった。

『見村沙希』

リン太は食い入るようにじっと見つめると、満足げに何度か頷いた。

「すげエじゃん。お前さん、字イ書けるんだ。にしてもガキンちょ
のくせに達筆ダな」

「一応習字教室通ってたからね」

毛筆は慣れてないけど、自分の名前くらいは綺麗に書けますとも！

リン太は何やら苦笑いして頭を掻いていたが、ポンと胡座の上に手
を置くとまたニツと笑った。

「よし。ンじゃよろしくな、ムラサキ」

……………??

「……………。……………。……………。ちょっと、何さ？ ムラサキって」

何その呼び方。寿司屋の醤油か？ 逆にリン太が『は？』という表情になる。

「だってお前いま自分で『見村沙希』って書いたじゃねエか。ミ・ムラサキって」

「そこで切るなー！！ ムラサキじゃなくて沙希だよ！ 見村までが名字だよ！」

フツーに考えて『見・村沙希』はないだろ！？ “ M I M u r a s a k i ” は！ やっぱコイツすげーバカだ。

落ち着け落ち着け落ち着け！ このバカの言動に惑わされてはいけない。とりあえず今は現状把握が第一だ。過去に飛ばされたということは…。

「いま何年？」

「天保9年だ」

わたしはふて寝を決め込んだ。

西暦で言えよ、天保っていつなのさ、学校でも塾でも歴史はまだやってないし、親にも歴史とかはスルーさせられてたから殆ど知りませんっ！

そうして、その天保9年とやらから、わたしの第2の人生が始まる。

幸せ？ 家族計画

それからしばらくして、わたしはリン太と一緒に彼の家に帰った。

動けるようになるまでご厄介になっていた男谷家は、どうやらリン太本人ではなくお父さんの実家だったらしい。あんた父ちゃん家で行き倒れ介抱してたのかよ。

『ベツに俺ンとこ来てもいいけどヨ…ホント何もないぜ？ めつちや貧乏だぜ？』

貧乏でも構うもんか。とにかく今のわたしには当座の衣食住が必要なんだ。なにもタダで泊めろとは言ってない。住むところさえ貸してくれれば皿洗いでもなんでもしてやる。

そういう覚悟で来たのだけれど…。

「ここだ」

「え…？」

リン太が示したのは、好意的に見てもあまりに質素すぎる家だった。

（ぼ、ボロい…）

中に入ってみて分かったのだが、天井も破れたままで放置してある。

貧乏だという言葉が本当だとすれば、どうやら修繕する金もないらしい。

じとーっとリン太を見上げると…立ってみて分かるけど、この人かなり低身長だな…彼は頭を掻いて苦笑いした。

「…わりイ…俺ン家、すげエ微禄だからヨ…40俵だからヨ…」

その、40俵ってのは（元の時代での）日本円にしてどのくらいなのさ。てか俵ってなんだ。口を開きかけたところに、パタパタと足音がした。

「おかえりー」

！？

え？ なにこの子！？

まさか娘さん？

「ただいまジュン…おわっ！？」

女の子は驚異のジャンプ力でリン太に飛び付くと、そのまま彼を押し倒す。臀部を打ち付けて顔をしかめるリン太に対し、女の子はキヤハハと楽しそうに笑っていた。

なんというか、天真爛漫というか無邪気というか奔放というか…とにかくフリーダムな子だなあ。

…で、この子は誰？

「リン太の娘さん？」

訊けば、よっこらせと立ち上がったリン太にまた殴られた。こっちに来て二度目の、ゴッソっ！　って方。

「いったー！　なにすんのさー！」

「てめエ誰が父親だ誰が！　俺のこと幾つだと思ってンだよ！？」

「だってその子まだ2、3歳くらいでしょ！？　ムスメじゃないなら君の何なのさー！」

「妹だー！」

目眩がした。

え？　妹？　だって10歳は軽く離れてるよね？　ていうか、お兄ちゃんと似てくない？

「それ、ジュンが俺に似ていても似ていなくても、お前エさんにとっちゃ複雑なんじゃねエの？」

「う」

そこは否定できない。しかもジュンちゃんは何故か笑ってるし…。

そんなわけで。

わたしはリン太の口添えで、どうにかこうにか居候させて頂くこと

になった。

やっぱり言うべきか、我が家にそんな食い扶持を増やす余裕はないって意見も出たらしいんだけど、なんか汚い手とか使って渋々承諾させたみたい。

「てめ、汚いは余計だったの」

ぶちぶち言いながらリン太は今日も、どこかへフラリと出掛けていった。

リン太は従兄の総一郎さん…精一郎さんだったかな？ その人に剣術を習っていて、家を留守にすることが多かった。精一郎さんって剣の世界じゃ超のつく有名ならしいんだけど、ごめん、ぶっちゃけわたし、剣道とかほっとんど分からない。なんちゃら力ゲリユウとか言われてもなー。まあでもわたしには関係ないからいいのだ。

その間わたしはもっぱらお仕事。掃除とか洗濯とか、あとジュンちゃんとの遊び相手とか。この時代って掃除機も洗濯機もないから、家事に慣れてないわたしにはそれなりに重労働だったりする。衣食住の保証付きだから文句は言わないけど。

そういえば着るものね、さすがにお着物時代に上下黒のジャージは変に目立つから、こっちの服にチェンジすることにした。お金貸ししてくださいって奥さん、えーと、リン太のお母さんに頭下げて頼んだら、地味でゴメンネとか言って古着を譲ってくれた。いい人だなあ。

「それでね、ムラサキさん」

こういうトコ以外は。

リン太がわたしを“ムラサキ”だと紹介してから、ご家族は揃ってわたしを「ムラサキ」と呼ぶ。

ムラサキじゃなくて沙希だと何度言ってもどこ吹く風。旦那さんは息子と負けず劣らずの変わり者だし、奥さんは芯が強いけど何処かズレてる。ジュンちゃんもあの通りフリーダムだから、もう訂正するの面倒臭くなって“ムラサキ”と呼ばれるままにしていた。そのうち本名を忘れそう。

「ムラサキさん？」

「あ、ハイ！ 申し訳ありません！」

「いえ、それは構わないのだけど……ムラサキさんって、後世から来たのよね？」

なんで知ってるんだー！？　つか、なんでフツーに信じちゃってるの受け入れちゃってるの！

「貴女の時代には、あの子の名前は伝わっているのかしら？」

「あの子、って、リン太郎さんのことですか？」

奥さんは頷く。だが如何せん、わたしの歴史の知識なんて皆無に等しい。学校でもまだやってないし、両親にも歴史は役立たないと言われて外国語とかばかりやらされてた。とりあえずわたしの記憶の中では、お着物時代にリントロウという名の有名人はいない。

正直に知らない言うと、奥さんはどこかホッとしたような、それでいてちょっぴり残念そうな顔をした。そりゃ自分の子供には期待するわな。…わたしの両親は明らかに期待しすぎだけど。

「よかったわ。あの子が変に後世にまで名を残すようなことがなくて」

「よかった？」

奥さんはくすくす笑う。

「易者によれば、あの子は天下を乱すか救うかの大人物になるそうなの」

それは…どうだろう。

知り合ってそんなに経ってないけど、確かにリン太はフツーには生きないだろうなって、そんな気はする。11年間生きてきて、あれだけ色々ブツ飛んだ人間は初めて見た。天下を揺るがす可能性は0とは言えない。

けど大人物になるかはな！。だってアイツ、天才的なバカじゃん？アレが偉くなったりでもしたら、周りの人も世間もキリキリ舞いだよ。どっちかつーと乱す方に傾きそうだ。

「そうね。私もそう思ったの。だから、安心したわ」

「え？」

「だって、名前が残ってないということは、平凡で幸せな人生を送

ったということでしょう？」

…平凡で幸せな生活…か。

思わず自嘲の笑みがこぼれた。

元の時代でのわたしには無縁の言葉だったなあ。学校終わったら塾とかお稽古で、遊ぶ暇なんか全っ然なくて。人付き合いもヘタだったから、誰かに合わせるだけで本気の付き合いなんてしてこなかったし。

それでも、何かにトクベツ優れてるとか、そういうのも全く無くて…さ。

周りが期待するような“世間的な成功”なんて、あり得なくて。だからってその“平凡で幸せな生活”も、手に入れることなんかできやしない。

じゃあ、わたしは何のために生きればいい？

どうして、生まれてきたりなんかしたのさ？

「え…ムラサキさん？」

気づけば涙が溢れていた。止まらなかった。止められなかった。

…どうして…わたしは死ねなかったのだろう。

生きる場所が変わったって。

どうせ何も変わらないのに。

…頭に、何かあたたかい物がのせられる。それが奥さんの掌だと、分かるまでにわたしは何度も荒い息を吸った。

空っぽの自分に吹き込まれた、それはきつと、昔に忘れた母の温もり。

時空移動者って結構いるの！？

「島田さん？」

リン太の口からその名前を聞いたのは、わたしがこちらに来てから初めての春だった。

ここでの生活中に変わったことと言えば、居候生活ですっかり家事全般に慣れたり、昔風ミミズ文字の読み書きが出来るようになったりとか、そのくらい。たまゝにしか会わないリン太なんかわたしの上達ぶりを見て「すっげー！ アツタマイーなお前！」とか言うだけ、ハッキリ言います。出来ない方がバカなんです。

何時代にあたるのかも探りを入れてみたけど、西暦採用されてないし時事的なものを言われてもピンと来ないから、未だに分かってない。ちなみに今は和暦で天保10年。だから何時代だよ！

「鈴木道場で知り合ってナ、それが浅草に道場を開いたらしーんだ。男谷サンの紹介もあるし、ちよつくら剣でも習ってくるわ」

簡単に習ってくるなどとぬかしたが、断られる可能性をコイツは考えてないのだろうか。しかも入門が叶えば間違いない寄宿だ。この、変に脱線しまくってる自信満々野郎が、薪水の労をとることなんかできるのか？

言おうとして、やめた。コイツは変なところに頭使って反論してく

るんだ、バカのくせに。だから無関心モロ出しにして嫌味たっぷり
言ってる。

「はいはい、んじゃ気をつけて行ってきてね。家族に恥かかせるよ
うなこと、しないでよ？　まー間違いなく迷惑かけるだろうけどさ。
…心配だな」

なんでかリン太が眉を動かした。

「なに言ってるんだ。お前エさんも行くんだよ」

「へ？　どこにさ」

「島田道場に決まってんだろ。男たるもの、自分の命くらい守れな
くてどーする」

いや、わたし、女だし。

…それに…。

「べつに、いつ殺されたって構わないし」

リン太が一瞬、眉をひそめた気がしたが、正直そんなのどうでもよ
かった。

わたしはあの日、本当なら死んでいたはずだった。だからいつ死ん
でも悔いはないし、怖くもない。そもそも生きること执着なんか
していない。

今日までしぶとく生きていたのも、ただ死ぬ理由が無かっただけの

ことだ。だから腹を切れ、とでも言われれば、きっとそのとおりにしていたらう。

ふと視線を感じて顔をあげると、リン太がわたしを見下ろしていた。悔しいかな相手はティーンエイジャー、バリバリの成長期だから未だに身長が追いつかない。ふざける、チビのくせに。

「…何があつたかは訊かねエけどヨ」

珍しく真面目な表情を見せつけられて、わたしは思わず背筋を正した。

つて、セスジをタダす？

なっんでこんなヤツに！！

「結局、自分の価値なんてものはサ、自分が決めりゃいいだけのことじゃねエ？」

「……………！」

絶句しているわたしを見て、彼はニヤリとした。真顔ならそこそこ見られる顔してるんだから、いつもそうしてりゃいいものを。

「だからヨ、どんなに辛くてもビンボーでも、自分で自分を殺すことだけアすんなよな」

「……………」

最後の台詞に一瞬、ギクリとしたが、目をそらすことですぐに冷静

さを取り戻す。

…コイツは知らないから。わたしが生きてきた世界を。

世の中の全ては人の好みだけで決められる。善悪も賢愚も美醜も、個人の生きる価値でさえも。それを前にすれば努力や才能なんて意味を成さない。過大な自己評価なんかしても虚しいだけだ。

分かっているのか？ 人に気に入られなければ汚点ばかりが独り歩きし、広まり、語り継がれることを。

そしてそれすらも個人のモノサシひとつでコロコロ変わってしまうことを。

「…何が分かるのさ。わたしは君とは違うんだ」

「！……………」

「そんな戯れ言を信じるほど、おめでたくはないんだよ」

「……………」

「……………」

冷たく吐き捨てると、リン太はふいと顔を背けて「準備しろ」とだけ言ってきた。このままでも気ままずくなるだけだし、頭を冷やすにはいい機会だと思って素直に従う。

（…でも、島田道場に行つて、それからどうすんだろ？ リン太はともかくわたしの場合、拒否られて帰されるだけだもんなー）

その予想は、半分だけの中した。

実は島田さん、そこそこ有名人だったみたい。

というのも島田さん、リン太の通ってた精一郎さん、s道場の師範代で（じゃあリン太もう島田さんに剣道習ってんじゃん）精一郎さんの内弟子だったらしい。更に遡れば生まれ故郷を拠点に、九州で名前をあげてたんだとか。剣道で。

話を戻そう。リン太はなんとかOK貰ったみたいなんだけど、やっぱりわたしにはイマイチな反応だった。わたしが12歳の女の子だからなのか。それともリン太のお父さん…長いからご隠居でいいかご隠居とも知り合いらしいから、親子揃って何か因縁でもあるのか（たぶん後者だろう）。

いずれにせよ島田さんがくれたアドバイスは、

『亀沢町を訪ねてみなさい』

とのことだった。しかも案内までつけてくれた。ちょっと気が短けどいい人だったな。

「先生は禅や儒教にも通じておられるから」

途中で寄った茶店で、案内人がそう教えてくれた。士郎さん…増田

士郎さん。見た目はリン太より少し歳上っぽいんだけど、雰囲気は真逆で育ちのよさそうな正統派完璧美青年。

「へえ。じゃあ、士郎さんも禅か儒学を？」

「いや、俺の信ずるところは救世主のみだ」

救世主？ あ、もしかして。

「もしかして、キリスト教ですか？ そっかー、士郎さんクリスチャンかあ」

ため息と一緒に呟くと、士郎さんは目を丸くしてわたしを見る。

…え？ なに？

「士郎さん？」

「…この時代の江戸で平然と『クリシタン』を口にできるとは…やはり」

やはり、なに？ いやそれより、わたし“クリシタン”でなく“クリスチャン”と言ったのデスが。

「そういうムラサキは？ 何を信仰している」

スルーかよ！

「わたし？ うーん、基本的に無宗教かな。神様なんて信じてないですし、信仰すれば救われるなんてこと、あるはずないですもん」

「そつか。…そうかもな」

「え？」

「かつて、島原では過酷な取立てが行われてな。民は前藩主の影響もあってキリシタンが多かったし、幕府は禁教令を出してキリシタンを迫害していたから、失政を隠すには丁度良かったのだろう。そこで俺たちは立ち上がった。籠城してポルトガルからの援助を待っていたんだが、その前に攻め入られてな。どうやら俺達の中に間者がいたようなんだ」

「酷い話…」

士郎さんは茶を啜り、寂しげな笑みを浮かべて溜め息をついた。

「それが200年ほど前で、未だに幕府が南蛮との交易を断つているところを見ると、どうやら俺たちは敗北したな。その間に目立った内乱も、起こってはいないようだしな」

……………。

「えっ？」

わたしは突然とんだ話についていけなかった。今の話を信じるとすれば、士郎さんはその島原の事変をその目で見ている。

けれどそれは200年も前のこと。普通にその当時の人間が生きているはずがない。しかも、まだ20歳そこそこの外見で…。

(…まさか…)

ハッとして、震撼した。そんな不可能事を可能にする手段が確かにある。でも、そんな。

「…時を、越えたんですか…？」

士郎さんはニヤリと笑う。…ニヤリ、ですか。ああ、美男子の『ニヤリ』がこんなに似合わないとは思わなかった…。

「やはり、ムラサキもその口か」

士郎さんは大きく息をついてから話し出した。

「俺は寛永15年から飛んだ。幕府の総攻撃を受けて原城で自害した…はずだったんだが、目が覚めると傷の手当てをされていた。それが3年前のことだ。時を越えたと知ったのは、ずいぶん後のことだな」

ポカンとして、それから自然に言葉が出る。

「わたしも…」

「え？ ムラサキも寛永から？」

「いえ。わたしは後世の東京…武州で服毒して、この時代に来たんです」

え、と士郎さんは絶句する。

「…目覚めたのは、ついこないですけど」

「…では、俺たちは過去の西と後世の東で己を害してから、この時代に来たのか？」

「そう、みたいです」

「…不思議だ」

「本当に」

くすくす笑いあっていると、お客さんが入ってきたので慌てて声を潜める。

「それから九州を渡り歩いて、中津で先生と出逢った。…それ以上は訊かないでくれ。今この場で答えるのはマズイからな、色々」

「あ、…はい」

「…最初は分からなかった。なぜ俺なんぞが生き延びる。生き延びて何の役に立つというのだ。少なくともそれに値する人間は、他にいるはずだな」

わたしは黙って頷いた。それはわたしもずっと思ってたことだったから。

「だがな、考えてみれば答えは簡単だった。神の教えでは自害は大罪、救われて天国に行けることはない。その罪を俺は犯した」

「ああ、そういえば。…じゃあわたしたちはその罪のために、永劫

苦しんで生きると罰せられた、と？」

士郎さんはシニカルに鼻で笑う。だから綺麗系男子のそーゆー笑顔は不似合いなんだってば！

「俺たちの間では、人の命と体は神から預かったものだと言われているな。人は役割を持って生まれ、それを果たしたときに預かり物を返す。ゆえに勝手に壊し、傷付けることは罪になる」

「…よく、分かりません…」

「つまり…俺たちは自分の役割がすでに無いものとして自害した。だが本来ならば生かされている限り、まだ役目は残っていたはずだ。だからこうして生き延びた。…残った役目を果たすためにな」

わたしは目を見開いた。その横で士郎さんは自嘲気味に笑う。

「畢竟、神は“全ての者”を救うためにおわすのだ。でなければ誰も信仰なんかせん」

時を越えてまで生かされているのは、するべきことが残っているから。そう信じたいと、彼は言った。

時空移動者って結構いるの！？（後書き）

作者からのお願い

言わずもがなで、寛永に原城で没したマスダシローさんが天保で生き延びてるわけ 아닙니다。作者が超ご都合主義のもと作り上げたどフィクションです。

そして時空を越えて人生やりなおせるなんて事態は十中八九起こらないので、軽い気持ちで自殺したりクリスチャンになったりしないでください。

在前でした。

中身の違いすぎる従兄弟

亀沢町を訪れるのは、実は初めてじゃない。

わたしは一切記憶にないが、最初に来て倒れてたのがここ男谷家前。未来で飲んだ薬を完全にデトックス（という表現でいいのだろうか？）するまで、ちよつとの間お世話になっていた場所だ。

島田さんが紹介してくれたのはその男谷道場。つまり、島田さんのお師匠にあたる、精一郎さんの道場。

案内してくれた士郎さんとは、道場の人と話があるとかで一旦ここで別れた。別れる前に精一郎さんの事を簡単に教えてくれた。

申し込まれた試合は必ず受け、しかも相手に三本中一本は譲って花を持たせるらしい。けどチャレンジャーは結局“花の一本”しかとれず、その例にもれない島田さんいわく「底知れぬ実力」なんだとか。

なのに対応は親切丁寧、高ぶるところがなく温厚な人格者だともっぱらの評判だそうだ。以上、士郎さんからの伝聞より一部抜粋。

（でも、あのリン太の従兄なんだよね）

あの家族の…特にリン太とご隠居の非常識ぶりは身に染みて分かってる。数ある『武勇伝』は多すぎて紹介しきれない。というか、非

常識すぎてわたしからは紹介したくない。頼むからこれでレベルを察してくれ！

このブツ飛び親子とは非常に控え目な遺伝子でしか繋がってないといえ、そもそも遺伝子だけで決定的に人格が決まるものでもないといえ、やっぱりモヤモヤした疑念は消えてくれなかった。だって、リン太の従兄だよ！？

（あーもう！　ぐちゃぐちゃ考えるのはやめ！！）

リン太ではないが、どうせなるようにしかなんのだ。精一郎さんが実際どんな人物だろうと関係ない！

…という覚悟でいざ面会したんだけど…。

「ようこそおいでくださいました。私が男谷道場の信友、精一郎です」

30歳前後の島田さんよりさらに歳上の男性が現れ、柔らかに微笑むなりそう自己紹介してくれた。……。……………。

えええええーつつつ！！！？？

（まさかの評判通りの人だよ！）

リン太と本当に従兄弟なのか疑わしくなってきた。だってアレを30年分老けさせたって絶対こうはならない。というか、ご隠居より歳上に見える。マジでそうなのか落ちていた雰囲気のせいなのかは、ちょっと分からないけど。

「ムラサキさん…あ、いや、見村さんでしたか。たしか虎之助の紹介でいらしたんですね？」

トラノスケ？ ああ、島田さんのことかな。

「ええ、まあ」

曖昧に頷けば、精一郎さんはくつくつと笑う。

「虎之助ねえ。彼は面白い人でしたよ。私が花を持たせてやったら、勢いで井上に試合を申し込みましてね。向こうで散々に負かされて入門を願ったら井上が私を紹介してくれたようで、それでまたひよっこり現れたんです」

「…は？」

先の見えない話に首をかしげると、精一郎さんはまたもや面白そうに笑う。

「紹介状を持ってきたと思いきや、再戦を申し込まれて。それでこちらにも本気を出したら、私の眼光に怖じ気づいたのか道場の隅で平伏しましてねえ…ふふつ、あれは見物でした。あとはまあ、そういうことですよ」

そ、それは…ちょーつと話が出来すぎじゃないかな…？

あーでもこれで島田さんが「内実も知らないで貴方をナメてましたゴメンナサイー！」って謝り倒して弟子入りしたとかじゃ、たしかに格好つかないよね。どっちが？ って、どっちも。

「それで、見村さんもあれ、入門を希望しに来たのですか？」

あ、そのこと全く考えてなかった。

「え…っと…まあ、無理にとは言いませんが…」

できるだけ遠慮がちに答えれば、精一郎さんは腕を組んで考え込んでしまった。

（やっぱり女の子が剣道とか、この時代にはおかしいのかな…？）

沈黙が重くて前言撤回しようと口を開きかけたそのとき…。

「失礼します」

男の人の声がしたかと思うと、開かれた襖の向こうで士郎さんが正座していた。

膝で入室してからまどろっこしい手順で襖を閉めると、こちらに向き直りビシッと最敬礼。

「男谷先生、お初にお目にかかります。わたくしは島田見山が内弟子、増田士郎時定と申します。御高名は予々…」

どうやらハジメマシテの挨拶らしいが、肝心の名前の部分がうまく聞き取れない。誰さ、ケンザンとかトキサダって…あーもう！なんつで昔の人は名前たくさん持ってたんだ！つか昔は名字なんて大層な身分じゃないと付かないんじゃないかなかったのか！？

いつの間に口上が終わったのか、精一郎さんに座布団をすすめられ

て土郎さんが私の隣に座る。うーん、正統派完璧イケメンは近くで見てもやっぱりイケメンだ。

「では、増田殿は虎之助の薦めで私に勝負を？」

「はい。わたくしごときが勝ちを取れる相手ではないことなど、重々承知しております。しかし当代随一と噂のその剣、是非この身体で覚えたく存じ、厚かましくも参った次第でございます」

精一郎さんはくつくつと笑う。

「どうぞ楽になさってください、増田殿」

「男谷先生、土郎で結構です。わたくしが島田でお叱りを受けてまいりますゆえ、どうか」

「そうですか…では、土郎と呼ばせてもらつよ」

につこり笑って立ち上がると、精一郎さんは「来なさい」と言つて土郎さんを立ち上がらせる。

「道場に案内しましょう。見村さんも、一緒に来てくれますか」

「えっ？ わ、わたしも…ですか？」

だってわたしは勝負する気など、毛頭ないのデスが。剣道素人だし。そうでなくても十中八九負けるし。

困惑して、同じく意味をとりかねている土郎さんと一緒に首を傾げると、精一郎さんはまたもやくつくつと笑う。

「戦わせる訳じゃない。若い女性が見ている傍では、士郎も無様な姿は晒せないでしょう。虎之助に何を吹き込まれたか知らないが、彼は私を買い被ってるようだ。その荒療治になればと思います」

「は、はあ…」

…なんか、偉そうに見えない所や言動がナゾな所はリン太に似てるかも、そう思ってしまった。ただし、すべて逆向きに。

どっちが好ましいって訊かれたら、そりゃ精一郎さんベクトルだしね。

生で見る剣道がこんなド迫力だったなんて、武道に疎いわたしは知らなかったんだ…。

「…さすが虎之助の教え子だ。でも、次はそうはいきませんよ」

「先生こそ。わたくしに花を持たせたのですから、本気で手合わせ願います」

体力は士郎さんの方が勝るものの、年齢と経験を重ねた精一郎さんの勘からくる技には未だ及ばない。ように見える。

(すい…)

両者が次々に繰り出す剣は、竹刀なのに重くて、速くて。しかもど
の一撃もピツタリとして無駄がなかった。

結局は例に漏れず精一郎さんが二本をとり、士郎さんは膝を屈する
ことになったのだけど。

「…参りました。わたくしの及ぶところではございません」

「当たり前です…と言いたいところですが、士郎も中々の腕でした
よ」

うーん、この謙虚さをリン太も見習ってほしい…。

すると士郎さんは正座に座り直し、それから大きく頭を下げた。

「男谷先生、お願いにございます。わたくしに直心影流男谷派、伝
授しては頂けないでしょうか」

…え？ なに、それ。

要するに弟子入りってこと？

口を開きかけた精一郎さんを制して、士郎さんは続ける。

「島田が申すには、わたくしの剣は師を真似たに過ぎないそうです。
ゆえに他派の剣も学び、己の殻を破って真の剣を極めよと」

「…つまり、心は島田派にありながら本流である男谷派の技を取り
入れ、己の力量を上げる足掛かりとして、私と虎之助を利用しよう
というわけですか」

「いつ、いえ！　そういう意味では…！」

「でも、結果としてそういうことになるでしょう？」

精一郎さん、痛烈。士郎さんもう言えはいいか分からないのか、しょんぼりしちゃってる…。

その様子に精一郎さんは少しだけ考え込んだあと、にっこり笑って深く頷いた。

「なら、こうしましょう。ここにいる見村も剣を習いたいという。ならば私が士郎に教えたことを、士郎が見村に教えなさい」

えっ！？

「男谷先生、それはどういう…」

「入門させては虎之助の面子に傷が付くでしょう。士郎には個人的な客分として、私自身が不利益にならない程度に剣を教えます。そして士郎は同じことを見村に施す。これなら誰にも不都合はない」

「しかしムラサ…見村は男谷先生にと…」

精一郎さんは穏やかな、けれども悪戯めいた笑顔で私に振り向く。

「見村もこんな年寄りに引っ付かれるよりは、若くて綺麗な男性に手取り足取り教わる方がいいでしょう？」

わたしは派手に固まってしまった。否定しても肯定してもどちらに

も失礼になるからだ。

こうしてわたしは男谷道場の下働きとして寄宿することになり、わたしに剣道を教えるという名目で、土郎さんも食客になったのでした。リン太の家で家事やっという正解だったよ。

けどね？ 土郎さんとはこれだけの付き合いじゃなくなるって、最初は思いもしなかったんだよ。

責任とれコノヤロー！！

亀沢町の男谷道場にいるムラサキ、略して亀紫。

いつしかそれが、わたしの本所での通り名になっていた。

「身元不明の小娘、なのに読み書き算盤はお手の物。そのうえ男谷道場で剣を習つてるとくりゃあ、そりゃ尾鰭でも背鰭でも付いてくるもんは付いてくんだろ」

ひとりそう勝手に納得して、うんうんと頷くリントローさん。てか島田道場にいるはずの君がなんでここにいの。

「島田サンからシローに言付かつてることがあってナ。稽古待ちつてワケ」

何の予告もなくコイツが男谷道場に現れてすぐ、精一郎さんは土郎さんを道場に連れ出した。いい人を地でいく精一郎さんでも、苦手なタイプはいるらしい。従弟なのに。

土郎さんへの対応は個人的な客分と言うだけあって、他のお弟子さんや食客の方とはずいぶん異なったものだった。わたしが道場の掃除や台所の手伝いをしている間に剣を習い、仕事が終わるとわたしに剣の指導をする。

そんな生活が続いて早1年、とりあえず竹刀さえ握れば痴漢を撃退

できるくらいの腕前にはなった。けれど土郎さんと本気で打ち合えば、やっぱり単なる棒振り体操。

関係ないけど本所で噂になってるのは通り名だけで、未来からタイムスリップしたことは男谷道場の誰も知らない。というより、そう弁解しても信じて貰えなかった。考えてみればその反応が普通だね。リン太と奥さんはその点ズレ過ぎだ。

土郎さんは…まあ自分も過去から来てるわけだし…、…そういえば、島田さんは土郎さんの素性とか知ってるのかな。

「いや、知らないと思うぜ俺も初耳だし？　　つかシローは過去から来たのか。話を聞く分にやアレあ九州モンかな」

土郎さんにはそのへん口止めされてるので、急遽話題を切り替える。

「そういえば君、ちゃんと真面目に修行してんの？」

「ふっふっふ、当ッたり前エよ！　俺あこれでもやるときはヤンぜ？　稽古が終わったら真っ直ぐ王子権現に行ってヨ、座禅と素振りを朝までに5、6回繰り返すんだ。それから帰ってすぐ朝稽古して、夕方になつとまた王子権現に行くってトコだな」

嘘つけ！　それが本当なら君いつ寝てるのさ。みのもんたじゃあるまいし。しかもあのクソ寒い中、稽古着のまま袷一枚で過ごせるもんか。風邪引くわ。

「そんでヨ、島田サンが剣を極めンにはまず禅学だってんで、今度牛島の弘福寺に行くことにしたんだわ」

「行くことにしたって…あのね、君そのナントカ寺に何しに行くか分かってんの？　遠足じゃないんだよ？　禅学って庭とか本堂とか見て精進料理たべることじゃないんだよ？」

言えば久々に頭をグーで殴られた。痛ったー！　毎日素振りしてるだけあって、拳骨の固さもレベルアップしてる。

「ばっかやろー、んなこと知ってるあ。禅学だろ？　坊さんがイキナリ肩シパーンって叩くアレだろ？」

「君さあその頭ゴーンって叩くの、いい加減やめてくれない！？　そりゃ馬鹿にしたわたしも悪かったけどさー！」

もー、なんかコイツには初っぱなから殴られっぱなしだ。出会い頭で殴られたのも、思い出してみればここ男谷家だったしな。

…あれ？　そういえば…。

「……………あのさ」

「なんだ？」

「……………わたしここに来たとき、ジャージから着替えてたよね」

「じゃーじ？　あーあの動きやすそで乾きやすそな黒い衣か？　さすがにずぶ濡れのまま寝かせるワケにゃいかねエから着替えさせたぞ」

自分で着替えた記憶はないから、やっぱり着替えさせてもらってた

のか。いや問題はそこじゃなくて。

「……………誰が？」

男谷家にはもちろん女の人もある。にもかかわらず不安にかられてしまうのは、看病してくれてたのがほとんどリン太だったからだ。

しかしリン太は珍しく優しく優しげに微笑むと、ジュンちゃんその他妹ちゃんズにするようにして頭をぽんぽん叩く。

心配するな、ってことかな？　杞憂に終わって良かった…

「俺が」

…た、と思ったわたしが馬鹿でした…。

え？

つまり、

コイツが、

わたしを、

着替えさせて？

……………え？

「にぎや ああああっ！？」

「なんだその踏み潰された猫みてえな悲鳴は」

「だだだだって、見たんでしょ！？ 見ちゃったんでしょ！？」

「はあ！？ 見てねえよ。あんな胸ねーくせして下腹ポッコンの幼児体型なんざ見たってつまんねーだろが」

「バツチリ見てるじゃんかあああああッ！！」

怒りと羞恥心の赴くままに、傍らに置いた盆でリン太の横つ面を張り倒してやった。続けざまに全体重を乗つけて頭に盆を振り下ろしてやる。

懷に肩を入れたところで土郎さんが部屋に来たけど、構わずリン太の上体をポカポカ殴る。

「もーバカバカバカ！ お嫁にいけないじゃんー！」

「だったら嫁がなきゃいいだろが。どーせ行き遅れ決定なんだからよ」

「くわー！！ ホント最っ低だな君はー！ 責任とれコノヤロー！ 一生かけてこの罪を償えー！」

「だいたいそこは「俺が嫁に貰ってやるよ」だろ！ どうせ全力でお断りするけど一応、男のエチケツトとして！」

見られたショックで動転していたわたしは、自分でも何を口走ったのか分からなかった。気付いたのはリン太がニヤニヤしながらわ

たしの目を見たときだ。

「…え？　それ俺に求婚してんの？」

自分の血が引いたのか頭に昇ったのか、もはや冷静には判断できなくなっていた。穴があつたら入りたい。いやむしろこの場でコイツを埋めてくれ。誰か、今すぐ！

「くつつつ、死ねッ！！」

もうほとんど勢いで盆を振り上げたときだった。

ヒュンッ！

「…………え…………？」

鋭く風を切る音がしたと同時に、リン太が視界から消失した。代わりに忽然と目の前に現れたのは…、…竹刀？

リン太が土郎さんの一撃をかわした。

そう状況を把握できた頃には、土郎さんがリン太の喉元に竹刀を突き付けていて。

「失せろ、俺への用事が済んだらな」

…兄弟子が弟弟子に向ける眼差しは、いつになく怖かった。

「まったくオシローはいちいち固エんだよなあッ」

ブツブツ言いながらリン太が門を出たときには、すでに七つ時分を迎えていた。元の時代で言うなら午後4時ほど。時刻の呼び名が違うのは知ってたけど、進め方そのものが違うと知ったときは軽くカルチャーショックだったな。

見送りに出たわたしの横で、土郎さんはツンとそっぽを向いていた。精一郎さんが門まで送れと言ったのだ。席を外したときに何を話したかは知らないが、リン太は土郎さんの苦手な人リストにも載ってしまったらしい。

そんなことなど露ほどにも察しやしないリン太は、思うままにずけずけと喋りまくった。

「シローはよ、もうちつと大物になった方がいいんじゃないか？」

平然を装ってはいるものの、近くで見れば小刻みに肩が震えてる。土郎さんの堪忍袋が、水風船のごとく膨らんでいくのが分かる。

「俺がムラサキにちよっかいかけたくれエで竹刀ぶん回すし、話してる最中にも俺のこと、遊惰者みてエな目で見やがるしよー。そんな小量なことじゃ江戸で修行は出来ねえって、島田サンに教わってねエの？」

ヤバい、緒が切れるより先に袋が爆発しそうだ。もう頼むから黙っててよナチュラルKYが！

破裂する寸前のところを針で突つくかと思いきや、リン太はニツと笑って話題を転換する。

「ところで、シローは酒は？」

「え？」

「何か土産でもと思ってたんだが、うつかりお前エさんの好みも訊かねえまま出ちまってよ。…で、飲むのか？　飲まねエのか？」

なんて脈絡のない奴だ…本当にコイツ馬鹿だよ、バカ！

士郎さんも同じことを思っただけ。長息すると「飲むことは飲むが修行中ゆえに今はやめている」と答えた。なぜかリン太も溜め息をついた。

「お前ホント器ちつちえーのな…じゃ、甘いモンは」

「……。…甘物なら、多少」

呆れられてる様子も意に介さずに、よし、とリン太は拳を掌に打ち込んだ。

「よし。じゃあいい店知ってるからヨ、浅草行こうぜ浅草」

「ちよつ、これからか？」

「たまにあハメ外すのも修行のうちだぞ？」

いや、それ絶対に違うと思う。

「それにハメ外したくねえで剣に差し障るんじゃ、折角の鍛練の意味がねエだろ？」

「……………」

それでも動かない土郎さんの手首を掴んで、リン太はニツと人を食ったような笑みを浮かべた。

「行こうぜ」

「……………」

その一言で。

土郎さんは眉を寄せてリン太の手を振り払うと、わたしに向き直り短く告げた。

「男谷先生には、無理強いされたと言っといてくれ」

それだけを残し、土郎さんはリン太を差し置いてさっさと先に行ってしまう。

リン太もニコニコしながら駆け足で追いかけるが、追い付いた途端に土郎さんから肘鉄をお見舞いされた。

そして翌日、土郎さんは苦笑しながら「別世界を見てきた」とわたしに語った。リン太が何をしでかしたのかは、あえて訊かない。

question () (前書き)

作者からのお願い

次話の舞台が何年も先の時代になるので、とりあえずワンクッションです。小説ではありません。色々と痛いです。

サイトさんからお題を拝借しましたが、何かルール違反とかしてたらご指摘お願いします。

在前でした。

question ()

天保×年某月某日

本所亀沢町男谷道場にて

本日のお題

●ライバルに質問(20)

01：まずは、お二人のお名前をどうぞ。

ム「見村沙希です」

リ「リン太郎」

02：お互いに、相手を何と呼びあっていますか？

ム「リン太」

リ「ムラサキ」

03：お互いに、相手の第一印象を教えてください。

ム「非常識な馬鹿」

リ「俺からしたらお前エさんのがずっと非常識だったぞ。変な身形してるしヨ」

ム「君はその次元を越えた非常識だけどね。未だに」

04：お二人ともライバル意識などは、どの程度もっていますか？

ム「…てか、わたしたちってライバルじゃない？」

リ「そもそも“らいばる”ってなんだ？」

05：相手に、これだけは負けられないというものは何ですか？
ム「全部負けたくないけど、とりあえず頭脳面では勝っていたい」
リ「剣で負けんのは絶対エやだ」

06：ケンカはしますか？
リ「顔見せる度にしてるよな。で、俺が一方的にボコられる」
ム「君が変なこと言わなきゃ、わたしだって大人しくしてるよ！」

07：以下の質問は、お二人を客観的にみて判定してもらいます。
どなたか審査員をよんでください。士「だからって何で俺…？」
リ「シロー以外に常連キャラがまだいねエんだよ。ま、頼むわ」
士「斬るぞ」

08：客観的にみて、頭がいいのはどっち？
士「ムラサキだろ。…と言いたいのが、リンの字も角度を変えて見ればある意味知性派なんだよな…」
ム「屁理屈と法螺話は得意な人だから」

09：客観的にみて、運動神経がいいのはどっち？
士「リンの字に竹刀をかわされたときは腹立たしかったぞ。ムラサキでさえ簡単によけられぬものを…！」
リ「だって俺叩かれたくねーし」

10：客観的にみて、モテる（モテそう）なのはどっち？
士「あの性格さえ直せば、リンの字は女性には困らなそうだがな」
ム「認めたくないけど、好みによっては男前とか言われる部類だね。あの人」
士「…俺はムラサキのような女性が好みだぞ（ボソツ）」

11：客観的にみて、おしゃれなのはどっち？

士「どちらもナリは質素だが、ムラサキは着こなしがうまい」
リ「まるで俺が身形に気を使ってねーみてえじゃねえかコラ」

12：客観的にみて、エロい（エロそう）なのはどっち？
士「リンの字」

リ「即答かよ」

13：以上です。審査員の方ありがとうございます。

リ「なんか俺けなされて終わってね!？」

士「自分の胸に手を当てて考えてみる。じゃあなムラサキ、後で稽古な」

ム「忙しいのにわざわざありがとうございます（ニコッ）」

14：では、再びお二人に質問します。相手の短所をいくらでもあげてください。

ム「いくらでもあげたら夜通し語れるよ？」

リ「てめエな。ムラサキはぶっきらぼうで素直じゃない。あと人生とか世間とか軽んじすぎ」

15：では、長所を。「ない」なんてナシですよ。

ム「何気なく良いこと言ってるよね。たまにだけど」

リ「クソ真面目なくせに妙な柔軟性があるところ」

16：もし、一日だけ相手と自分が入れ替わったらどうしますか？

ム「考えたくもない」

リ「風呂と廁と着替えの時は目エ瞑ってやるよ」

ム「君そんなキャラだっけ!？」

17：もし、一日だけ相手と部屋に閉じ込められたらどうしますか？ム「せめて犬一匹くらいは一緒に…」

リ「……！！？」（↑ダッシュで逃亡）

ム「……えーと、相棒が戻るまでわたし一人で答えますね」

18：もし、相手が異性だったらどう思いますか？

ム「意識してなかったけど、一応アイツも異性なんだよね……なんだかなあ〜」

19：もし、相手に二度と会えないとしたらどう思いますか？

ム「出来ることなら二度と会えないように、今すぐこの手で抹消したい」

リ「じゃあテメエが元の時代に帰りやがれ」（↑戻ってきた）

20：なんだかんだで、仲良しのお二人でした。最後にお互いに一言お願いします。

リ「まア拾っちゃった以上、最後まで面倒見てやるよ」

ム「なんで君のが偉そうなのさ。あと人のこと捨て犬みたいに言わないでくれる？」

リ「だから俺の前で犬とか言っつない！！」（↑再逃亡）

気付いたときには遅かった

自慢じゃないけど、いやゴメンナサイやっぱり自慢です。元の時代で英才教育もどきを受けていたわたしは、英語とフランス語は日常会話くらいなら軽くこなせる。

だがしかし、天保…年号変わったから弘化か。この時代では外国語といえバオランダ語のことで、洋学といえバオランダの学問、この時代で言うところの蘭学らしい。

「それで？ リンの字は入門を願ったが、その甲斐なく門前払いされたというわけか」

豆柴によく似た仔犬と戯れながら、土郎さんがそう呟いた。こないだ道場に迷い込んでたのを保護して、精一郎さんには内緒にして2人で飼っている。

さすがに5年近く一緒にいるからか、土郎さんとは兄妹同然に仲良くなつた。時空を越えた者同士、他人には言えないようなことも腹を割って話せるからかもしれない。

だがしかし、それに伴って妙な噂が立ったのもまた事実なわけだ。

「いつも2人でコソコソどっか行くとしたら、仲良く仔犬の世話かよ」

お弟子さんのひとりがニヤニヤしながらこちらに寄ってきた。昨日の夕飯の残り（ネギを除く）を2人で与えていたところ。

「何かご用ですか？」

「いや？ 2人でなんかイケナイことでもしてんのかなーって、覗き？」

そこまで言われて冷静だったのは、ムキになったら余計に誤解されると思ったからだ。イケナイことだと疑ってるなら初めから覗かないで下さい。野暮です。

なのに士郎さんてば、顔を真つ赤にするなりお弟子さんに突っかった。負けじと相手も逃げ出した。小学生かアンタら。呆れて大人2人の追いかけてこを見てると、誰かが横でしみじみと呟いた。

「ふうん。シローほどの堅物でもやっぱムラサキには甘いんだな」

「うーん甘いつていうか、たぶんアレはわたしを気にしてるというより、変なこと言われて自分が迷惑してるだけだと思う」

「…そうなのか？」

「そうだよ。じゃなきゃ毎回あそこまでムキにならないよ。放つとけば自然と消える話なんだし…だからきつと、知らんぷり出来ないくらい迷惑に思ってたんだよ」

自分で結論付けたら、なんでか悲しくなってきた。それがなんだ。人に距離を置かれるのは慣れていたはずなのに。

「もしかしてわたし、嫌われてるのかな…?」

ついポロリと口に出してしまうと、横で人影がニッと笑った（気がした）。

「いや、シローに限ってそれはないと思うぜ」

「そうだよね…って、ん？」

「ん？」

…ちよっ!?

なんで君がここにいるのー!!

「うわあっ! リン太!? び、びっくりしたあ…もう、いきなり登場しないでよ!」

「けっこう普通に居たんだがな」

「よくここが分かったね。けっこう人目につかないところ選んだつもりだけど」

「まア、それはアレだ。勝手知ったるナントヤラってな」

「…今日は何の用さ」

ふっふっふ、と意味ありげな笑いをこぼすと、ようやくわたしの方を振り返る。

「聞いて喜べ！ シローに仕事の依頼が来…、…っツ！！！！？」

「？」

依頼が来、と中途半端すぎるところで区切って、リン太がカピツと硬直した。そして見る見る間に顔が蒼白になっていく。

「どうしたのさ？……………あ」

気付いたときには遅かった。

わたしの抱えてる仔犬が欠伸をしたのを合図に、青白い顔から一斉に汗が吹き出す。

瞬間、奇声とも悲鳴ともyeah！ ともつかない叫びをあげて、リン太は用件も告げずにダッシュで逃げていった…。

（…あー…そういえばアイツ、犬嫌いなんだっけ…）

だからって、こんな仔犬にまで逃げてどうすんだよ。本当に過去にどんなトラウマがあるのか訊いてみたい。精一郎さんだったら知ってるかな？

きつと男谷邸をメチャクチャに駆けているだろうリン太を捕まえるべく、とりあえず仔犬をその場に置いてわたしは捜しに出掛けたのだった。

ことは、リン太が箕作某という蘭学の先生に入塾を断られた事から始まる。

門番に小粒を握らせてまでしてとうとう面会が叶ったものの、君のような人間は学問に向かないＹＯ！と断られたらしい。そりやそ。うだ。お医者様や学者先生みたいな秀才型に混じって、こんな小生意気そうな青二才なんか置きたくはない。それでも世界地図は見せて貰ったらしいけど。

だがしかし、そんなことでへこたれるコイツではない。今度は赤坂の永井某とかいう先生に入門を願ったところ、意外や意外すんなりＯＫしてくれた。

で、家も赤坂に移して本格的にお勉強を開始して今に至るというわけ。ちなみにこの間にリン太は島田さんから直心影流島田派の免許皆伝を授かっている。持つてる価値がよく分からないけど、乱暴に表現するならサムライの雇用に有利な資格といったところらしい。

その免許皆伝した翌年あたり…ちょうど去年だかに出逢ったのが、士郎さんを雇いたいという学者先生だそうだ。

「佐久間先生！？ あの！？」

「なんだ、お前知ってたのか」

「知ってるもなにも、お玉ヶ池のショウザン先生だろう？ 和漢洋すべての学問に通じ、先見の明ある英雄肌の御仁と聞いているぞ」

…なに、そのサクマ先生ってそんなに凄いの？ てか、そんなスゴ

イ人と知り合いになっちゃったの？ 斜向かいでリン太がなんかビミョーな顔になる。

「えー… あれあどつちかつつーと、法螺吹きで軽はずみでチヨコチヨコしてるだけなんじゃねえ？」

「馬鹿を言え。蘭船の購入、西洋式火器の充実、海軍の育成。どれも世界情勢を鑑み、先を見てこそその卓越した考えじゃないか」

「海軍の育成？」

「つて軍隊を作るってこと？」

わたしが思わず口を挟めば、リン太は呆れたような顔で頭を掻き、士郎さんがキョトンとしてすぐに切なく笑った。士郎さんはまだしもリン太の反応はなんかムカつく。

「ムラサキ、このところ頻繁に外国船が出没しているのは知ってるな？」

「はい… それは一応…」

士郎さんの言葉を引き継ぎ、リン太がマジ顔で力説する。

「お前エさんの時代じゃアそうでもねえみてエだが、俺たち大概してに異国との付き合いに馴染みがねえ。船で来た連中は日ノ本を乗っ取る気だつてんで、そうなる前に追っ払っちまおうって考えてる奴もいる」

「ええ！？」

まさか。

愕然としていると、士郎さんが静かに言い添える。

「あくまで噂だ。しかし、たとえ他国の介入を受け入れたとして、こちらの国力が劣っていると見られたら、確実に日ノ本は経済が武力かによって他国に支配される」

「そのためにあ海防が重要になってくるンだよ。ナメられねエためにも強い装備をチラつかせにやらんし、万一攻められたところで海軍がありや反撃できンだろ？」

この時代には国連も非戦論も自衛隊も憲法第9条も存在しなかったのだろうか。いや、日本国憲法自体ないのは把握してるけど。

「幕府もそれにあ頭悩ませちやいるが、どーにも解決するだけの力がねえ。なんたって天保ン時に水野越前守が奢侈を禁じて、町人の贅沢なんかえれエ厳しく禁止したくれエだかん」

「ああ…それでそのサクマ先生って人の考えも、非現実的だって受け入れられなかったんだ？」

「…場合によっては」

士郎さんの声音が一際硬くなった。綺麗な横顔に厳しいものが浮かぶ。

「外国船を打ち払う力もない幕府を潰し、自分達の手で国力を上げようと動き出す者も出てくるだろうな」

チラ、と土郎さんが挑発的な眼差しを何処かに投げる。視線の先を辿れば、リン太がそれを受けて寂しげに苦笑した。

「攘夷と倒幕…か」

そう呟く声も、いつになく、珍しく、硬質だった。

どうして、元の時代で歴史を振り返らなかったのだろう。そう後悔するまでのカウントダウンが始まったことに、わたしはまだ、気付いていなかった。

新婚さん(宅に)いらっしゃーい

嫉妬というのは好きな人にするものなのか、それとも好きな人を奪ったアイツにするものなのか、たまに分からなくなることがある。

ましてやそれが恋愛感情ではなく、しかも初対面の女性に対してなら尚更よく分からないだろう。

『あのよ…お前エに、その…会わせたい奴がいるんだ』

父親にオトコを紹介する娘みたいな台詞で道場を連れ出され、わたしは久しぶりに(住所変わってるけど)コイツン家にやってきた。ちよっと中に入った感じでは、相変わらずド貧乏は健在みたい。

「なんか、懐かしいなー」

「? なにがだ?」

未来から飛ばされて倒れてたのを拾われて、男谷さん家から初めて家に連れてって貰ったこと。

(もう7年になるんだね…)

過去に思いを馳せていたら、パタパタと足音が聞こえてきた。なにこれデジャブ? またもや幼女が笑顔で出迎えるのを待ち構えてると…。

「おかえりなさいませ」

！？

え？ うそ。

…確かに20年前は間違いなく幼女デスが…。

…わたしたちを出迎えたのは、見覚えのない綺麗な女性…。

どっ、どなたですか貴女様は！？

「スミマセンお邪魔しました失礼しましたーっ！！」

慌てて踵を返し走り去ろうというところで、リン太に襟首を捕まれて阻止された。コラ、そんなあり得ない捕まえ方はリアルの世界でやらないの！

「お前の場合はウデとか掴んだら絶対エ振り払うだろがっ。っーかなんで逃げる」

「だって君のことだからどこぞの人妻たらしこんでメイドカフェよろしく『お帰りなさいませご主人様あー』とかやらせてついでだから自分好みのメイドに育てちゃえ的な光源氏計画施行中なのかなあちよっといやかなりヤバイけどーとか思っで！」

「……………は？」

「……………え？」

なんでも知らないけど啞然とされた。ついでに目の前のお姉さんもキョトン顔。

「…何が何だかよく分からんが…とりあえず…」

ゴツッ！！

「痛つつつたあー！！」

「デメエいま俺たち2人まとめて罵っただろ！ ああ！？」

「濡れ衣だ！！ 確かに君だけは散々に罵っただけだし、お姉さんには罵倒のバの字も浴びせてないからね！ ていうかホントに誰なのさこのすんごい綺麗な女の人は！！」

「俺の新妻だ馬鹿たれ！！」

目眩がした。

ニイヅマ？ 新妻ってあの新妻でいいんだよね。え？ なに知らない間に新婚さんいらっしゃーいしてんの？ てか、いつの間にお嫁さん貰ってたの？？

ほけーっと奥さん（らしき人）を見てみると、彼女は上品に笑いかけてくれる。それにしても美人だな、わたしより年上かな…なんてつつい見とれてしまい、それが恥ずかしくて顔が熱をもつのがわかった。

「あつ、申し訳ございません。挨拶もしないで失礼しました！ お

初にお目にかかります、わたしは……」

「男谷道場の亀紫だ。こないだ話したろ？」

空気読めよりん太ー！！

さりげなく足を踏んで黙らせようとしたけど、奥さんがくすぐすと艶かしく笑ったので未遂に終わった。

「きち、なにがおかしい？」

「だって、あなた『亀紫は男勝りな醜女だ』なんて言ったじゃないですか。なのに実際こうして会ってみれば、本当に可愛いお嬢さんなんですもの」

可愛いなんて、貴女の方がずっと可愛いです。いやどっちかといえは綺麗系なんだけど、可愛い要素もない訳じゃない。割合で言うなら綺麗：可愛い＝8：2くらい。

ていうかりん太のヤロー、奥さんにそんなホラ話まで言いやがったのか！　ちくしょー今に見てろ、あとで奥さんにあることないこと全部喋ってやる！！

で、そんな暇もなく夕飯をご馳走になってるわけですが。出されたのが白米と沢庵だけという、さながら禅宗のお坊さん並みの粗食でした。禅学のお勉強中にかじった知識なのか、ただ単にド貧乏でエネルギー係数が低いのか。絶対後者だろ、うん。

覚悟はしてたけど、3畳間に2人きりになると当然のごとくのろけられた。そのくせ馴れ初め話には一切触れなかった。奥さんのこと

は「きち」か「君江」で呼べとか、君江というのは奥さんが深川の芸者さんだった頃の名前だとか、あとリン太より2歳上の姉さん女房だとか、そんなのばっか。

「そんでこの極貧生活に文句も言わないし、一方で夫である君は勉強と称して洋書読んでるだけか。きち姉さんならもつとイイ人いそうなのにー。なあんか君には勿体ないよなあ」

「おうよ。なんたつて俺の自慢の嫁だぜ」

皮肉も通じないってか！ くそ。

そこまでゾッコンなんだからさ、浮気なんてしちゃダメだよ？ 君のことだから分からないけど。

青雲を踏み外して、それから

「あ、ご飯ならわたしがよそります!」

そう名乗り出れば、きち姉さんは目を丸くした。

「とんでもない! お客様にそんなことさせられません!」

「お客様だなんて。わたしだって元はこの家の下働きみたいなものですし、男谷道場でも炊事洗濯して生活してたんです。気にしないでわたしに任せて下さい」

「でも」

どっちがご飯をよそるか言い争ってしばし、それまで傍観していたリン太がウザそうに口を開いた。

「どっちでもいいーから早く飯よそろうぜ。俺ハラ減った」

「君が空腹かどうかなんて訊いてない」

「ンだとコラ。お前そんなんだから未だに嫁の貰い手がねエんだよ。あんだけ仲いいくせしてヨ、シローにすら口説かれてねエんだろ?」

自分が嫁さん貰ったからっていい気になるな。こんなリア充は無視だ、無視。おひつを挟んできち姉さんが「土郎さんって?」と訊き

たそうにしてる。でもここはあえてスルーだ。ああごめんなさい。

「つうかヨ」

リン太があぐらの上に肘を乗せて頬杖をついた。

「どっちがどっちの飯よそるかでもめてンだろ？　だったら互いによそり合えばいい話じゃねエか」

あ。

(…それもそうだ…)

こいつ、非常識なくせして変なところで知恵が働くな。…だからこそ気に食わないんだけどね。馬鹿なのか知恵付いてるのかどっちかにしてくれ。

くすくす声がしてそちらに視線を移せば、きち姉さんが今まで見た中で一番面白そうに笑っている。

「リンさんは本当に利口者です」

その何が気に入らないのか。リン太が眉間に皺を寄せて口を尖らせた。

「…そこせめて『賢い』くらいにしてくんね？」

姉さん気取りに膨れてたのかよ。しょうがないじゃん。きち姉さんからすれば、君なんて弟みたいなものなんだからさ。

[illegible]

「で」

きちと二人きりになると、リン太郎は珍しいことに厳しい面差しを妻に向けた。

「やっぱりムラサキを置いておくのは反対か」

しばらく黙考したのち、妻も静かながらどこか強い覇気を湛えた目を夫に向ける。

「そうね。理由はどうあれ、やっぱり貴方が若い女性を傍に置いてるのを見るのは嫌だわ」

ぐっ、とリン太郎は息を呑んだ。

「貴方の言う通り、あの子は本所で生涯を終えるには惜しい人です。一風妙ではあるけど、学もあるし剣も使える。貴方が男谷道場にこのまま置いておくより、手元に置いて育てたいと思うのも、分らないでもないわ」

「……………」

「でもねえ、私だって1人の女よ？ 自分の夫が妻以外の女性に首ったけで、嫌に思わない女なんていないわ。たとえその高い評価が、沙希さんを女として人間として見ているわけでもなくて」

きちとリン太郎の間に火花が散った。種類は違えど、矜持の高い者だけが持つ独特の雰囲気当真つ向からぶつかり合い、部屋の空気が他者の侵入を許さない何かで満たされる。

どちらかが折れない限り消えることのないそれは、きちが優艶な微笑みを浮かべることで呆気なく消え去った。

「…と言ったら、貴方は考え直していただけますか？」

「っ、お前…」

リン太郎は口をつぐんだ。一見して折れたのはきちのようではあるが、ただ単に勝ちを譲って貰っただけであることなど、リン太郎にも理解できる。決して両者とも認めないであろうが、根は争いを好まない平和主義者なのだ。

それでも、少し前を歩く妻にさえ理解できないだろう事情が自分にはある。

「きち」

「はい」

リン太郎の声色が少しだけ変わった。わざと視線をそらした横顔に

も、いつもの軽薄さは感じられない。

「俺がアイツを拾ったのは、青雲を踏み外してすぐだった」

青雲を踏み外したあの日、自分の将来は空っぽになった。

思えば、最初からすべて出来すぎていたのだ。7つのとき、遠戚に誘われて江戸城本丸の庭見物に行ったことも。そこで將軍の目に留まり、孫である初之丞の学友にしたいと申し出があったのも。

どうやら闊達なところを気に入られたと言うことらしいが、本当のところは分からない。ともあれ2、3年ほど出仕して、初之丞は数年後に一橋家を継いだ。通例通り家臣を連れていくことになってはいたが、その中にリン太郎の名もあったのだ。

一橋家と言えば御三卿のひとつ。そこに重臣として仕えるだけでも40俵取り小普請組にとってはあり得ないほどの大出世。加えて運よく初之丞が將軍になったりしたら、側用人になる可能性も夢じゃない。

運が良かったとはこのことを言うのだ。一度死にかけた自分が今なお生かされているのは、このためだったのかもしれない。

幼少の時、それこそ初之丞の学友だった頃、野犬に急所を噛まれて死にかけた。けれど父親の懸命な介抱もあって一命を取り止めた。おかげで今でも犬は苦手だが、この時もしも死んでいたら、このような夢を見ることさえ許されなかったのだ。

けれど、やっぱり夢は夢でしかないのか。

期待を寄せた父が息子に家督を相続した直後、初之丞は急死してしまふ。この時点でもはやリン太郎はただの無価値な貧乏旗本でしかなく、すべては単なる夢物語に終わった。

——何のために生きればいい？

そんな愚かしい自問を繰り返したことは否めない。いや、貧乏旗本は貧乏旗本なりに生きる意味も価値もあるのだろう。

けれど、叶うかもしれない夢が消え去って、自分の将来はただ空白の頁が連なってるようにしか思えなかったのだ。この時は。

「そのときムラサキが男谷さん家に倒れてたんだ」

無理矢理にも男谷家の敷居を跨いで、医者に診てもらい、目が覚めるまで見守った。処置はしたが死にかけてたと思っていただけに、いきなり突き飛ばされたときは驚いた。

けれど、再び視線が合った刹那。

『誰も助けてくれとは言つてません。あと拾ったとか恩着せがましく言わないでもらえますか？』

…生きる気はないのだと、硝子玉のように無機質な目が訴えた。

同時に、自分も同じような目をしていたことに気付いたのだ。空白の頁が連なる将来を、何一つ期待せず見つめるばかりの眼差しと。

——それがなんだ。不要なものは棄てられ、必要なものだけが残る。それが世の中だろう。

この子供だって、誰かに必要とされなければそれまでなのだ。奇妙な身形も持ち合わせた知識も、それだけでもこの日ノ本で生きていくには不適合に過ぎる。――誰も彼女を必要とほしくないだろう。そしておそらく、彼女もその将来の断片に気付いてる。

でも、助けた子供が生にも死にも無頓着なのは、見ていて面白くなかった。

（だから、アイツで確かめたかったのかもしれないな）

お役御免で棄てられたもう1つの人生。それが叶わないのであれば、どうしてあるとき死なずに済んだ？

自分を必要としている将来は、世の中は、なんだ。

何のために自分は未だに生かされてるんだ。

答えはまだ、見つかっていないけれど。

「その答えみたいなものを、ムラサキにも見つけてほしかったんだよ」

生きることも死ぬことも諦めていた少女。その子が自分に用意された様々な道を見出し、選び、顔を上げて歩けるようになったら。

初めて、自分も自分の人生を肯定できる気がする。

話が終わるまで、きちは黙って耳を傾けるだけだった。少しの間、しんと沈黙が空間を支配した。

やがて、きちが意味ありげにくすくすと忍び笑いを漏らす。

「何が可笑しい」

「いえ、リンさんは本当に利口者だと思ひまして」

「…だからそこ『賢い』くらいにしろってンだろ」

リン太郎がまたもや口を尖らせれば、きは優雅に微笑した。

「私なんて、幼い頃どんな夢を語ったのかも忘れてしまいました」

そういうことが、と呟いてから、リン太郎は板を剥がした天井を見上げた。

けれどももし自分が答えを見つけたら、代わりにきちを幸せにすることはできないだろう。そんな予感がして、リン太郎は理不尽な寂しさを覚えるのであった。

類はパトロンを呼ぶ…マジ！？

あのヤロー人に面倒事おしつけてどこほつつき歩いてんだ！ 帰ったらその腐った性根たたき直してくれんぞこるあー！！

1日1回は文机に向かって同じ文句を繰り返すこと約半年、毎日筆を握って腱鞘炎になりかけながらも、今日も今日とてオランダ語の辞書を書き写していた。

「ごめんなさいね、あなたにこんなことさせてしまつて」

きち姉さんが白湯を持ってきてくれる。ガツとそれを掴むと、怒りに任せて一気に飲み干した。

「いえ！ きち姉さんが気にするようなことはありませんっ！」

当たり散らさないよう抑えたつもりだったが、きち姉さんは何とも言えないビミョーな表情を浮かべて何も言ってくれなかった。そこまでイライラが露骨に出てたか？ いけない、いけない。

そう、どこをどう取っても悪いのはアイツだ。きち姉さんに罪はないんだから。

外国語を勉強するには当たり前だけど辞書がいる。しかしその辞書は58部で60両とかなり高額で、3畳間の畳も天井も直せないド貧乏には到底買えるものではない。貨幣価値としては1両で米1年

分に相当するらしいから、乱暴に勘定すれば単身世帯の消費する米60年分か。そりゃ無理だわな。

そこで、どこぞのオランダ医が持ってたらしい蘭和辞書を借り、10両の損料を払うことで丸写ししようというわけだ。この時代の日本に知的財産権は無かったのかよ。

（なのにリン太のヤロー、ひとに半年も写させといてからに、毎晩毎晩朝帰りしやがって!!）

最初こそ2人で写していたのだが、ある日を境にリン太は夜中フラリと出掛けるようになった。日中も突然いなくなることがあり、町屋の本屋で目撃情報が確認されている。仮にも一家の大黒柱が遊び歩くな！ 働けやこのニートが！

ずっと文字とにらめっこでは流石に目が疲れてくる。筆を置いて目頭を押さえてると、若い男性の声が耳に入った。

「じめんください」

（え？）

この声…もしかして!？

何も考えてなかった。期待と不安で胸がいつぱいになりながら、早足で出入り口まで急いでいた。

「…土郎さん！」

「久しぶりだな、ムラサキ…ってなんだ？ その顔」

「え？」

「まるで昼間に幽霊でも見たような顔してるぞ」

「だって、久々にお会いしたものですから…嬉しくて」

結局あれから、士郎さんはサクマ先生の護衛として暮らしている。

形式上は島田さんの弟子で精一郎さんの食客だから、本格的に移るまでには色々と準備が必要になる。それまでは頻繁に会っていたけど、士郎さんがサクマ先生と一緒に信州に越してからは全くと言っていいほど音信不通だったのだ。文通するにもこの時代の郵便制度では金額的にも結構キツイ。

「こっちも何かとあったからな。ムラサキには寂しい思いをさせたようだ」

「本当ですよ！」

士郎さんが面食らった表情になる。けれどわたしにだって言いたいことくらいあるんだよ。

「士郎さんはわたしにとって大切な友人なんですから。兄のように慕う方から何の音沙汰もなくて、寂しくないはずがないでしょう」

「……………」

「士郎さん？」

「…願わくは、もうひとつ位を上げて欲しいのだが…」

「？ 位…って、何のですか？」

分らないならいい、と何故か物凄く拗ねられた。どうしちゃったんだろ、土郎さんらしくないな。

「ところでリンの字はいるか？」

「ああ、リン太なら出掛けてます。また書物屋じゃないですか？」

「書物屋…？ そうか、では行き違ったか…参ったな…」

なにやら本気で困ってる様子に、次の言葉を繋ぐのを躊躇ってしまふ。

「あの、用件ならわたしが伝えておきますから」

「いや、用があるのは俺じゃないんだ」

なんだかいつもより齒切れが悪い。本当どうしちゃったんだろう。

なんだか2人でもじもじしていると、土郎さんの後ろからひょっこり男の人が現れた。

「失礼します。カツさんのお住まいはこちらでございますか」

「は、はい…？」

カツさん、というのがリン太の通り名らしかった。ご隠居もそう呼

ばれてるから名字らしいと判断したのだが、ぶっちゃけ「カツ」だけで呼ばれても該当する名字が思い浮かばない。だって後に続くであろう残りの音は何なんだよ。葛飾とか勝浦とか桂木とか、地名っぽいものならなんとかなる。

ので、もう面倒だからカタカナの「カツ」だけで決着つけることにした。カツさん。文字にすると連続テレビ小説のタイトルみたい。

後からやって来た男性はわたしが不審の目で見ると……何しろ本当に初めて見る顔なのだ……痩せ形で色白の外見には似合わない、毅然とした空気を纏って笑った。

「失礼、私は函館の商人で浜田利右衛門と申します。カツさんにお話したいことが御座いまして参りました」

リエモンさんとリン太との出会いは、日本橋と江戸橋の間にある小さな本屋だそうだ。

お互いにその店の常連さんだったのを店主に紹介され（でもリン太は間違いなく立ち読みオンリーだよ。本買ってきたの見たことないし）、永代橋近くの旅館でゆっくり話してるうちに、すっかり意気投合してしまったらしい。

それでまた、日を改めてゆっくり話そうとその日は別れ、こうして今日、リン太の家を訪ねたということなのだが。

「肝心の家が分からなくて迷子になって困つてるところを、たまたま通りかかった士郎さんに案内してもらった、と」

「…いやはや、本当にお恥ずかしい限りで」

商人なのになんてせつかちな…。

3畳間のボロ畳に座らせてるというのに、リエモンさんはいたって平気そうだった。士郎さんがチラリと横目で盗み見れば、彼は高ぶる様子もなく微笑する。

「しかし、話はカツさんから聞いていましたが、まさか本当にこのようなお住まいだったとは」

「…こちらこそまったくお恥ずかしい限りです…」

それもこれもあのバカが少しでも働いていればっ！　せめて内職で1日中バラの造花でも作ってるってんだ。ん？　この時代にはまだ無いのか。

リエモンさんの目が部屋の隅にある文机に留まった。急な来客だったので片付けが間に合わず、とりあえず見苦しくない様に寄せいたのだ。

「ああ、あれが例の『ドゥーフ・ハルマ』ですか？」

「え？　あ、はい。借り物なのでさっき写してたところなんです」

わたしが、と付け足そうとしたけどやっぱりやめた。わたしの目が泳いでいたのだろう、士郎さんがプツと控えめにだけど吹き出す。

もしかして胸のうちバレバレ？ もう、笑わないでよバカ！

それと同時に、なるほど、と意味ありげにリエモンさんが呟いた。その直後だった。

「ただいま」

やたら上機嫌な声でリン太が帰ってきたのは。

「おかえりいー。早速だけど君にお客さん来てるよー」

「客？ 誰だ、女か？」

走って出迎えて一発ぶん殴りたい衝動を必死で抑える。土郎さんは今更として、リエモンさんの前でそんな醜態は晒せない。

何やら本と紙を抱えて入ってきたリン太は、友達2人の姿を見るなり顔をパアツと輝かせた。

「なんだ、渋谷サンとシローじゃねえか！」

「リンの字、その本はどうした」

土郎さん同様、リエモンさんも持っていた本に釘付けになる。リン太は唯一空いていたわたしの隣に座ると、得意気にそれを見せびらかした。さながら新しく買って貰った玩具を見せびらかす子供みたいに。

「これか？ 四谷に住んでる大場つつー与力から貰った」

「貰ったって…そういう値段じゃないでしょう!？」

書物屋で見かけたときは確か50両でしたよ、とリエモンさんは問い詰める。高っ！

「だから頑張つて50両用意したつてのに、先にその与力に買われちまってよー。頼み込んでも譲ってくんねえから、半年かけて写してきたんだぜ？」

しかも、勝手に持ち出さないという条件のもと、所有者の寝てる夜中に。ああそれで毎晩どこかなくなつてたのか。

「でな？　ちいつと俺にあ分からねエ部分があつたんで、書き終わつてからその与力に2、3質問したんだけどヨ、そしたらソイツなんて言つたと思う？」

「…なんて言つたの？」

『私はまだ全て読み終わっていないし、そのような疑問を持ったこともありません。これは私が所有するより、あなたが持っていた方が有意義でしょう』

「……………それマジ？」

リン太は得意気にニツと笑う。

「俺あもう写し終わったんだからいいつつただけどナ、ソイツが是非について聞かねエから、こうして貰ってきたつてワケよ」

士郎さんもりエモンさんも呆氣にとられてた。わたしも開いた口が

塞がらないや。これが本当なら、なんかすんごい出来すぎた話だも
ん。

あれ？ でも、てことは…。

「それで、その頂いてきた本はどうするの？」

「…それなんだよなあ」

リン太は髪をガシガシとかき混ぜた。

「借りてきた50両は紙代に使っちゃったし、借りた金は返さにや
ならんし。だからといって俺が写した方を、同じ値段で売っ払うワ
ケにもいかなエだろ？」

やっぱりこの時代に著作権法は無いのか。

「貰った方を売るってエ手もあるが、買い手が余程の書物好きか、
勉強熱心な奴か…確かな御仁じゃねエと親切で貰った手前、気安く
売っ払うなんて出来ねエよ」

「…僭越ですが」

それまで黙って聞いていたりエモンさんが口を開いた。なんだ？

「気に障るようでしたら申し訳ない。もし宜しければ、その書物を
私に売って下さいませんか」

……………。

え、
え、
え？

（リエモンさん、今なんて…？）

突然のとんでもない申し出に、一同、啞然。わたしたちの反応を楽しんでるかのよう、リエモンさんは話を続けた。

「私は江戸へ出る度に珍本をかなり購入するのですが、これを郷里の者に説き聞かせるとなれば、いい話の種になります。どうです、私の楽しみのために譲っては頂けないでしょうか」

「いや、そいつぁ願ってもねえ話だが…」

「…なら、これでどうです？」

金で話をつけようとする金満家みたいなセリフと一緒に、リエモンさんは懷から小判を取り出した。

それも、1枚や2枚じゃない。積み重ねれば時代劇で悪代官が貰う賄賂くらいの厚みが…。

「200両で如何でしょう。多いと思うようでしたら、この金でまた珍しい書物でも買って下さい」

リエモンさんーつつっ！？

さすがのリン太も返す言葉が見付からなかったらしい。まじまじと食い入るよう見つめられても、リエモンさんは毅然とした態度を

崩さずに言葉を紡いだ。

「遠慮なさるな。このくらいの金は貴方に差し上げずとも、じきにくだらないことに遣ってしまうでしょう。どうしてもと仰るのであれば、貴方がこの金で買った書物を私に送って下さい。もちろん、読み終えた物で構いません」

それでもまだ言葉の見つからないわたしたちに、リエモンさんは静かな目で、受けとるよう、促してくる。

類は友達だけでなく金も呼んだ。そして、わたしの知る世の中には在るはずもない、誇大妄想のように出来すぎた話も。

類はパトロンを呼ぶ…マジ！？（後書き）

作者からのお願い

今回登場した北海道の地名は時代的に「箱館」なのですが、主人公が歴史に疎い設定なので「函館」と表記しました。

その兼に関して今更とは思いますが、リン太郎や士郎みたいに（主人公の知識にはない名前で）正体丸分かりの人物が今後も出てくる予定です。ので、誰だか気付いても心の中にそっとしまって下さると物凄くありがたいです…。

在前でした。

素晴らしきかな平和ボケ

元の時代で聞いた話だけど、江戸の蕎麦食いはお蕎麦の先だけに汁をつけるものらしい。郷に入れば郷に従え、わたしたちもそうやってお蕎麦を啜っていた。

4人で。

「…なんで4人なんだろう…」

当初の予定では、わたしと士郎さんだけのはずだったのに…。

あの後リン太とリエモンさんは、昼までガールズトークよろしく談笑していた。男ふたりが3畳間を独占してるので辞書の書き写しも出来ず、ごはんどうしよかなーとか外で考えてた時だった。

士郎さんに「蕎麦を食おう」と誘われたのは。

無二の親友と久々に会えたのだから、ランチに誘われればそりゃ嬉しい。近所のファミレスにパスタを食べに行くような気軽さで、わたしは士郎さんと出掛けたのだ。

きち姉さんも誘ったんだけど、せっかくだから2人水入らずで行ってきなさいってニコニコされた。ほんと、リン太には勿体ないくらいいい人だなあ。

だのに、コイツときたら。

「おう、お前エらも来たのか」

「…ちょ！？　な、なんでっ？」

いつの間に先回りされてたのか、土郎さんが連れてってくれたお蕎麦屋さんで、リン太あんどリエモンさんの頭文字「コンビと鉢合わせた。なななんなんでっ！？　なんで君たちがここにいるの！？

「浜田サンが蕎麦おごってくれるっつーからヨ、ここは生まれも育ちも江戸の俺が、蕎麦の美味いトコ案内したってワケよ」

案内したって！　結果的には自分の食べたいお蕎麦たかってるだけじゃんか！！

「ムラサキにだけあ言われたかねエな。お前エさんだってシローの財布アテにしてンだろ？」

「そ、そんなわけないでしょ！」

嘘です。ゴメンナサイ、嘘です。本当は奢って貰う気満々でした。もちろんお礼は（本心から）言うつもりだけどさ。というか、わたし個人の今の所持金じゃう。い棒全種類制覇するのが精々だよ…。同情するなら金をくれって、この時代で言っても流行るかな？

そんなこんなで、過去人と未来人と旅行者（？）と地元民（？？）という、共通性の欠片もない四人組で蕎麦をたぐってるわけだ。しかもリエモンさんがまとめてお代を払ってくれた。すみませんねえ。

「そういえば、ムラサキさんはオランダの言語に通じているのですか？」

リエモンさんの突拍子もない質問に、啜つてた蕎麦で思い切りむせてしまった。ケホケホ言つてると土郎さんが背中を撫でてくれる。

「いや、失礼。話を聞いてると、異国に明るい聡明な方だと思われましたので。きっと外国語も達者なのではないかと」

「外国語とつ、いつて、もっ…んんつ。わたしが話せるのは英語とフランス語だけですから」

「エイゴ？」

土郎さんが語尾を上げて呟くと、リン太が箸で空中に何かを書く。

「シナをずーっと西に進んだところにあるのがフランス、そっから海峡を挟んで北にある島国がイギリス、英語つてのはそのイギリスで使われる言語だな」

言つて、何か気付いたようにわたしの方を見た。

「メリケンの言葉は一風変わった英語だつてのは、本当か？」

「…わたしはその一風変わった英語ばかり勉強してたけどね」

イギリス英語も出来ないわけじゃないが、日常的に聞きなれてる点ではアメリカ英語の方が馴染みがあった。

わたしたち2人の会話に土郎さんはキョトンとし、リエモンさんは

くすりと笑う。

「カツさんもムラサキさんも、異国がお好きなんですね」

これにはなぜかリン太の方がキョトンとした。

「…浜田サンは異国が嫌いかな？」

「興味がないと言えば嘘になりますが…」

一旦区切って、はんなりと切なげに笑う。

「世間はそれを許さないでしょう。他国介入を快く思わない者にとつて、彼等は日ノ本を喰らに來た鬼にしか見えないはずですよ」

「そいつあまた」

蕎麦を噉ると、喉で味わうようにして飲み込んだ。

「よく知りもしないくせに、えらい怯えようだねえ」

他人事と思えるくらい呑気な台詞とニヤニヤ笑いに、生真面目な土郎さんは眉を潜めた。

「リンの字は、異国に日ノ本を盗られても平気だと言うのか」

「そりゃあ、脅されて揺すられて大人しく明け渡すのは癪だけだよ。だからって怖がるばかりで無意味に追っ払ったんじゃ、何の利益にもなんねえだろ」

「利益云々の話ではない、誇りの問題だろう。異国に興味を持つなとは言わない。だが、自国を蔑ろにするは道に悖る」

「蔑ろ？　してねーだろ。日ノ本には良いところがある。同じように異国にだって面白いモンがある。片方だけを優先させるんじゃないくてダな、両方の良い所を半分ずつ足しやいいだろうってんの」

「しかし…」

「どのみち日本は異国とぶつかることになるけどね、色々と」

しまった、と思った時には遅かった。思わずポロリと未来の断片を口にしてしまっていた。リン太と土郎さんはともかく、ここにはわたしの素性を知らないリエモンさんだっているのだ。

案の定、男3人がわたしに探るような視線を向けてくる。あああゝ見ないでえゝ。

「…あ、えつと…ホラ！　リン太みたいなのが兵学書読むくらいだから、そうやって外国の、兵法？　を取り入れてるお偉いさんもあるでしょう多分。そういう人が国を動かす立場につけば、受け入れるにしろ追い払うにしろ他国との関わりは必然的に密接になるはず…なーんて、思ったりして…」

ピンチになると立て板に水とばかりに、ペラペラ喋るのが昔からの癖だ。それでも人によって言葉は選んでる。だいたい外したことはない。

土郎さんは「国を動かす…か」と意味深に呟き、リン太は「俺『みたいなの』言うな」と不機嫌になった。リエモンさんは黙って1回

頷いただけだった。

「しかし、今の幕府では無理だろうな。一応、幕臣とはいえ武士が公然と蘭学を学ぶのは禁じられていると聞いた」

ここで士郎さんがチラリとリン太を見る。

「まあ、怖いもの知らずとはよく言ったもので、公然どころか精力的に蘭学に没頭している、無役の幕臣もいるようだがな」

「…まあ、細かいことはどうでも良いでしょう」

「どうでもいい？」

「ええ。私のような力のない者からすれば、こうして皆と蕎麦が食べられればいいだけの話ですからね」

ちげえねえ、とリン太も笑う。平和ボケっていつの時代にもあるんだね。初めて知ったよ。

かくしてお江戸風ランチタイムはそれなりに楽しく(?)過ぎて行き、リエモンさんとはここで別れた。また会いましょうと商人スマイルを残した細身の背中が、人混みに紛れて遠ざかる。

わたしはホッと溜め息をついた。そして腕の中にある罫紙の束を見下ろした。

「…本当に貰っちゃって良かったのかな、これ…」

わたしとリン太の欧米トークに興味を示して…いや本当は紙代にも

事欠くド貧乏ぶりを氣遣ったんだろうけど…面白い蘭書があったら翻訳して、これに書いて送って下さいってプレゼントしてくれたのだ。おまけに「筆耕料はあの200両から」と、こちらが断れないように釘を刺された。なかなか粹なことするでないかい。

にしても、なんでリン太と親しい人はこう、感じのいい人ばかりなんだろ。島田さんとか精一郎さんとかきち姉さんとかリエモンさんとか…。

（まったく、羨ましい奴だよ）

本人が決して「いい人」でないだけあって、ちょっとジェラシー。

「なに、簡単なことだ」

横でコソツと士郎さんが囁いた。帰らなくて大丈夫なんですかと訊いたら、きち姉さんに挨拶してから帰るつもりだという。

「考えてもみろ、あの馬鹿げた非常識っぷりについていける者たちだぞ。利害関係なしに付き合ってるのなら、人として素晴らしいのは当然だろう」

「ああ、なるほど」

「…聞こえてンぞデメエら」

苦々しげに振り向いたリン太に、わたしは「べっ」と舌を出してやった。もちろん、嫉妬心もかなり込めて。つくづく腹立たしい奴だよコイツは。

けれど、本当は分かつてる。

リン太と違って、わたしは誰とも適当にしか付き合ってた。嫌われないように、敵を作らないように合わせていただけなのだから、心から慕ってくる味方がいなかったのも当然だ。

リン太は馬鹿で非常識な男だからきつと敵も多いだろうし、死んだ後にも増えるだろう。だけどその嫌われる要因が、リン太が本気で人と向き合った結果なら——本気分だけ、慕ってくる人には心底親しまれる。

（あるいは、毛嫌いしながらも離れていかない士郎さんみたいに）集まってくる人たちの数や質の違いが、本気で接したか適当だったかの違いなら、これが正当なる待遇の差なのだろう。

不意に、足の動きが止まる。足音ひとつ分おいて、リン太と士郎さんも立ち止まった。

「どうしたムラサキ」

「腹でも痛エのか？」

心配そうな目で見られるのがなんだか気まずくて、わたしは慌てて笑顔を作り首をふる。

「うつん、何でもない」

（…なんでわたし、こんな必死になってんだろ…）

こないだまで、自分が生きてることさえ、どうでもいいと思ってたのに。

なんで今さら、人付き合いに失敗したこと後悔してんの？

（わたしもある意味、平和ボケしてんのかな）

家に帰ると、きち姉さんが笑顔で出迎えてくれた。絵に描いたような美人の良妻ぶりに思わず苦笑が漏れる。

…ほんと、リン太の周りの人はアイツには勿体ないよ。

「奥さん、先ほどはどうも」

士郎さんがきち姉さんに軽く頭を下げる。それに応えてきち姉さんも深々とお辞儀した。ていうか。

（2人が並ぶと絵になるなあ…。リン太には悪いけど、年齢的にもこっちの方がお似合いだったりして）

不謹慎にも程があることを考えてしまつて、同時に、…シクシクと胸が痛んだ。

（…あれ？…）

…士郎さんの隣には、きち姉さんみたいな人がきつと似合う。

じゃあ、さっきまで隣を歩いてたわたしの方は？

誰にも悟られないように、俯いてからくしゃりと笑った。そうしな

いと何故か泣きそうだった。

（本当にわたし…どうかしてる）

誰の隣にも、わたしはきつと相応しくない。そう思ってしまうだけじゃなく、それがこんなに苦しいなんて。

このときわたしは、自分が士郎さんとは不釣り合いというだけで、どうしてこんなに寂しくなるのか、全く分かっていなかった。

好きなんだよ、きづけばか（）（前書き）

作者からのお願い

次回のエピソードが時間軸も話の展開も進みすぎてしまったので、
またもやワンクッションです。相変わらず痛すぎるので要注意。

前回とは別のサイトさんからお題を拝借しましたので、ルール違反
してたらご指摘お願いします。

在前でした。

好きなんだよ、きづけばか（ ）

嘉永×年某月某日

信州松代藩より江戸を想う

本日のお題

●土↓紫で5題

【二人の距離、5cm】

左から横に流れる罫紙での文にもずいぶん慣れた。最初こそ驚いて「これは何だ」と訊いたら、彼女の時代ではごく親しい関係でのみ使われる形式らしい。

彼女の時代——そう、彼女は俺が二百年前に死んだはずの人間だと告げると、自分も後世の武州からやってきた者だと告白したのだ。

あのときの彼女の顔は見物だったが、俺も内心驚いていた。まさか、自分と同じ境遇の人間が他にもいたとは。

安心した。何よりも嬉しかった。厳密な意味で同朋などいない世界で、存在しないはずの仲間と巡り逢えたのだから。

自惚れてもいいなら、彼女も同じ気持ちだったと信じたい。はじめは固く表情を閉ざしていたのに、男谷先生の許で共に重ねた月日の分だけ、笑顔を見せてくれるようになったから。

そして、いつからだろう。何の躊躇いもなく自分に向けてくる笑顔を、何よりも好ましく思うようになっていったのは。

——馬鹿馬鹿しい。

最初は簡単に消せると踏んでいた。けれども雪のように静かに降り積もった想いは、雪のように消えてはくれなかった。

過去の西と後世の東、絶対に逢うことはなかったはずなのに。

どうして…。

——自分の最後を捧げてまでも、貴女が欲しいと願うのは。

（きつと僕たちは近付きすぎた）

【曖昧感情表現】

傍にただで鼓動が速くなる。でも安心するから一緒にいたい。でも照れくさい。

そう、隣に寄り添いながら彼女は呟いた。麟の字にさえこのような感情は抱かなかったと言うが。

「親友と二人でごはん食べに行くときって、こんな感じが普通なんですかね」

——子供のように無邪気な笑顔が、ここまで憎らしく見えたことはない。

けれど、道場にいるとき稽古以外で触れることのなかった手が、

「土郎さん」

俺の手を握りしめてきただけで、

「はぐれないように、ずっと手を繋いでてもいいですか？」

少しだけ期待してしまう、馬鹿な俺が顔を出した。

（このとき僕はなんて返した？）

【不器用なりのラブソング】

俺から見たお前？ そうだな…

矜持が高くて自信家で

理想が高くて完璧主義

頑固で堅物で素直じゃない

他人にも自分にも厳し過ぎる

反面、本当はすごく涙もろくて

ふと笑った顔が最高に可愛くて

そんなお前だから俺は――

「…やはりやめておこう」

書いたら急に恥ずかしくなって、自分に苦笑しつつ書きかけの文を破いた。

(僕だけが知る君のいいところ)

【仏頂面の天使】

「士郎さん」

「なんだ？」

「士郎さんのお母様なら、きっと綺麗な人なんでしょうね」

「どうした、いきなり」

「きち姉さんとか見てもやっぱりときめいたりしますか？」

「俺は人妻に興味はないが…いやそれより本当どうした」

「…なんか自信なくしちゃって」

「は？」

「士郎さんときち姉さんが仲良く話してるのを見て、なんだか寂しくなったんですね。わたしだけおいてけぼりにされてるみたいな疎外感」

「……………」

「士郎さんの女性を見る眼って、条件も厳しそうじゃないですか。士郎さん顔キレイですし、中身もカッコいいですし。周りを囲ってたのは美人ばかりでしょうから、それが基準値になってるはずですよん」

「……………」

「士郎さんとはいかないまでも、そのくらいの男性に好かれれば、自信の持ちようもありますけど。…そんなの絶対無理だし…」

「……………」

「士郎さんから見て、わたしってまだ光りそうですか？　どこから磨けばいいと思いますか？」

「…まずはその鈍いところを直したらどうだ？」

「真面目に答えて下さいッ！」

「う、わ、悪かった…」

（ああ、やっと妬いてくれたね）

短い用事を済ませてから部屋に戻り、再び文机に向かう。途中で筆を置いた文に目を遠し、俺は我ながら失笑した。

（らしくもなく感傷的だな）

114

が欲しいからだ。

民のためと謳って立ち上がりながら、結局は多くの仲間を失った。傀儡として持ち上げられた身も同然とはいえ、本来なら民に殉じて死ぬべきだったものを、何の気まぐれかこうして生かされている。

残された役目を果たすためと彼女には言ったが、実際はその役目が何なのか見つけていない。

けれど、あの時どうにも動かせなかった時代は次第に変わりつつある。俺が自分の役目を見つけるのも時間の問題かもしれない。

だから生き恥さらして落ち延びてなお、新しい世の中で生きようと思う。——願わくは、同じ運命を背負った彼女の傍で。

（今になって皆に詫びるか…）

出逢うはずのなかった彼女の心を手に入れたい。それを運命が許すなら、散っていった仲間にもまだ詫びようがあるから。

【好きなんだよ、きづけばか】

(
C
)
黑
猫

待ち人来たりて

わたしがリエモンさんと知り合ってから5、6年。お蕎麦屋さんでランチを一緒にした後、リン太あてに罫紙がたびたび送られてくるようになっていた。コツコツ貯めていた飛脚代が許す限り、リン太から紙を分けてもらってわたしも土郎さんに手紙を出していた。

今ではサクマ先生が江戸に戻ってきたから、土郎さんとは直に会ってまた仲良くしてもらってる。

余談だけど、紙代はずいぶん楽になったから、ドゥーフ・ハルマツて蘭和辞典を（強制的に手伝わせて2人で！）2部写した。1部は所有、もう1部は損料を払うために60両で売るという前提で。

リエモンさんから200両もらってんだから買えよとか、写したのを原本と同じ価格で売っちゃマズいだろか思ったが、あのゴーイングマイウェイにそんな忠告が届く訳がない。結局はリン太の蘭学の先生だったセーガイ先生が買ってくれたんだけどね…この時代には著作権という概念すらないのか。

蘭学の先生といえば、そのセーガイ先生にプッシュされてリン太も塾を開くことになった。とはいえ先生が貧乏だから教わる方に富裕層なんかいるはずもなく、それでも評判はそこそ良いように入塾希望者もそれなりに訪れた。

「だが、あのリンの字がマトモな授業なんかできるのか？ 初歩的

な文法なんか教える気はないってクチだろ、アレは」

サクマ先生が書いて下さった額のお礼に木挽町の塾を訪ねたのに、ごく自然な流れで土郎さんとの茶飲み話に突入した。大事に書齋に飾らせて頂いてますって。ちなみに額には『海舟書屋』って書いてあるんだけど、書屋はまだ分かったとしてウミフネって何なんだろう？
まあいいや。

「リン太を擁護するつもりはないですけど、教わりに来る生徒さんたちも本気なら、教える側が適当すぎても自分で調べたり覚えたりしますよ、きつと。それに、ああ見えてリン太も面倒見は良い方ですし…対処法はかなりズレてますけどね」

「…ふーん。ずいぶんと奴を信賴してるじゃないか？」

10年近く養ってもらってる手前、そこまでボロクソに言えない。

「それに、こないだ新しく先生も雇ったんですよ。杉さんっていう方なんですけど、以前は中津藩江戸藩邸の蘭学校で教えてたんですって」

「へえ？ それはまた、ずいぶん変わった御仁だな」

うん。たしかにあの人はちよつと変わってた。

なにせ「貴方ほどの塾なら教えられる人がいますよ」と切り出し、最後に「それは私です」とオチをつけた人だ。

リン太はそういうタイプ、好きそうだからなあ。杉さんも月給2分…単純計算して年給6両…で了承しちゃうし。

「本音を言えば、もうちょっと世間ずれしてくれたら嬉しいんですけどねえ。ご隠居も亡くなられたし、子供だっているのに」

「いや、以前よりは世間様の役に立つようにはなったんじゃないか？ 赤坂田町の鉄砲と津藩は川口の野戦砲…だったか？」

意味をとりかねて首を傾ければ、士郎さんはほろ苦く微笑む。

「俺の教育が良いからだ、サクマ先生も自慢しておられた」

サクマ先生の人となりを思い出してしまい、わたしも自然と微苦笑になる。

リン太も大した自信家だと思ってたけど、サクマ先生はそれに輪をかけた御仁で、どこかこう、人を見下すような威圧感すらあった。言葉を交わす限り傑物なのは事実だから、それそのものを嫌に感じたことはあまりない。

実際、对外政策としてサクマ先生がかつて考えていたという、西洋式火器の訓練も進められ、西洋の兵学に通じた人間に銃・大砲製作の依頼が舞い込むという事態まで先生は予測していた（と、自分で言っただけに入ってた）。何気なくサクマ先生に師事してたリン太もその1人で、緒藩から2斤3斤と注文が殺到していたのだ。

噂どおり先見の明ある人らしい。とはいえいつの時代でも、天才というのは常人とは遠くかけ離れた価値観を持つものらしくて…。

「まーすだー、ちょっとムラサキ借りてくぞあー！」

やたら呑気な口調とは全く別に、ピリピリというよりはドツと押し寄せるような覇気が迫ってくる。

見れば、個性的な顔立ちに人を食ったような笑みを浮かべて、緞子の羽織を引つ掛けたサクマ先生がどーんと立っていた。

「サクマ先生、お役目はもう済んだのですか？」

「サクマ先生、先日はありがとうございました」

士郎さんとわたし、ほぼ同時に声をかける。先生は迷うことなくわたしにだけ応えた。

「へへ、まさかムラサキから礼を言われるとはなー、なーに、かわいい義兄のためならあれくらいのことは、な」

兄ちゃん相手に上から目線だな。でもリン太の方が干支一個分近く年下だから仕方ない。

…そう。

リン太の妹のジュンちゃんが、こないだサクマ先生に嫁いだのだ。だからリン太はサクマ先生の義理の兄という立場になる。ちなみにこのときジュンちゃん16歳、サクマ先生は42歳。元の時代だったら思わず、親子かっ！？ とツッコみたくなるほどの年の差婚だ。やるねえ、サクマ先生。

「はっは、男と女がくつつくのに歳なんか関係あるか。要は向こうの求めてくる条件と、こっちが求める条件が合えばいいだけの話だろ？ 俺にとっちゃ年齢も身分も国も、世間が騒ぐほど比重の大き

いもんじゃねえ」

うん。ここまでは正しい。非常に偉い。元の時代でも立派に通用するだろう主張だ。が。

「器量と頭が良くて体格も立派で尻のでっかい女なら、そんなものなくたって俺の血を継いだ大人物を産めるからな」

それはそれで差別的発言じゃないか？

「ムラサキもなー、早いとこ嫁がなきゃ子供も産めなくなるぞ？
せつかく器量も頭も尻も良いもん持ってんのにー、その血を後世に伝えないなんて大恥だぜ？」

「ほつといてくださいッ！！」

セクハラー！ なにげにセクハラ発言しちゃってるよこの人っ！
この時代じゃどうなのか知らないけど、高齡初産と呼べるのは35歳以上だつてWHOも定義してんだよ！ ていつかそもそも。

「わたしは子供持つ予定ないからいいんです！」

「へえ？ そりゃまたどうして」

しれっと訊かれてますます言葉に詰まった。どうして？

「どうしてって…そういう主義なんですよ」

「主義？ ふうん、理由になってねえな。主義ってのは思想と同じで、そこに行き着くまでに悩んで考えて道を選び抜くもんだ。お前

さんはそう心に決めたというが、そう決意せざるを得なかった理由でもあんのか？ 俺が聞いているのはな、そーゆーところよ」

「……………」

わたしは嘆息した。なのに言われるまま自分でも分かっていない理由を探していた。ここまで無遠慮に人の心に土足で入り込む人も珍しい。

そうせざるを得なかった理由？

そんなもの、たぶんない。強いていうなら、わたしには誰かを好きになる権利はないと思っていたから。

「どうしてそう思う」

どうして？ どうしてだろう。

最初はそれでも構わなかった。友達が極端に少なくても、元の時代では俗世間の子とは格が違うという教育を施されていたから。

けれど、気付いてしまった。

世間はそんなわたしを求めているくないこと。自分が生きる世界でいつも選ばれるのは、求められるのはいつもその「俗世間の子」だったのだ。流行に疎ければ世間の常識にも疎く、受け身の人生を送っているのなら応用問題に滅法弱い。

その汚点にすら気付かずに他人を見下す、冷たくて傲慢で才に驕る子供など、いったい誰が求める？

（だから、自分を殺したんだ）

世界にわたしを求める存在がないなら、これ以上生き続ける必要もない。そう思ったから。

そう仕向けたのは自分なのに、慕ってくる誰かが隣にいる他人を見れば胸が痛んだ。もはや引き返すには遅すぎたのも分かってたし、その苦しみから逃れたかったのもあるけれど。

死にたかったわけじゃない。それでも人生の敗者として世界に未練を残す自分を許せなかった。

そう……だから、人を好きになることから目を背けてたんだ。

理由なんて、たぶんそれだけ。

「……だれも、わたしを好になることはないですから……嫌いな人に好かれたら、誰だって迷惑に思うでしょう？」

ぼそぼそと呟く。土郎さんは少しだけ悲しそうに目を伏せ、一方でサクマ先生は実に素っ気なく間髪入れずに言葉を繋いだ。

「ムラサキ、アンタ、そーやって強がってるがな。人間ってやつは誰だって1人じゃ生きられねえ」

最後の台詞を耳がとらえた途端、ちくつ、と胸が小さな悲鳴をあげた。

「生きるのが辛い奴はいないからな。しかも人は自分が自分に

一番甘いもんだ。だから背負ってる物を支えてもらいたくなんのは当たり前で、自分を支えてくれる人生の伴侶を探そうと必死になるもんなんだよ。生きてる限りな」

「…サクマ先生は、必死になりすぎですよ。前の奥様が亡くなられたからジユンちゃんを妻に迎えて、そのうえ沢山の女性と暮らしていらっしやる」

「そりゃあ、俺は背負ってるもんがデカイからな。そんな重いもの1人で支えるよか、大勢で支える方が負担は少なくなんだろ？…そんな風にな、生きてりゃ誰でも辛くなつて、それが苦しいだけなら自分を殺すより先に、ムリヤリにでも誰かを引き寄せる力が人にはあるもんだ」

「でも」

「ムラサキも人並みに重い肩の荷を背負っていながら、その歳まで意地張って生きてこられた。そいつはなんでだ？」

「…それは…」

「だったら話は簡単だ。そーやって意地を張れるだけの支えが、ムラサキの中にあつたんだな。目をそらすフリをしながら、手だけはしっかり伸ばして、そいつが手を握り返してくれんのを、ずーっと待ってたんذار」

尋ねるようなような口調で言われても、それが正解かなんて自分でも分からない。サクマ先生は土郎さんの表情をチラリと窺ってから、再びわたしに視線を移した。

「俺は羨ましかつたんだぜ？ アンタみたいなイイ女に、ずーっと一途に想われてる奴がな。だから…もつと周りをよく見てみるよ。狭い視野に騙されんな。世界は馬鹿みたいにデカイんだから」

互いに手を取り合える相手が、きつと見つかるさ。

言い残し、踵を返したサクマ先生を、士郎さんが呼び止めた。

「先生、ムラサキに何か用があつたのでは」

「あ」

あれ？ そういえば…。

ピタッ、と足を止めて引き返すなり、わたしの腕を強く掴んで引く張るサクマ先生。

「悪い、忘れてた！ 増田、少しムラサキ借りてくぞ！ 塾の連中待ちくたびれてる」

「ちょ、いいいい痛いですって！ そんなに引つ張んなくても、ちゃんと急ぎますから！」

ああ、なんでジュンちゃんはこの人のお嫁さんになつたんだろ…。

助けを求めて士郎さんを見れば、三十を過ぎてなお綺麗な顔に麗しい微笑を浮かべて「頑張れ」と口を動かしていた。……………。

（助けるよ薄情者！ つつっ！）

本当はずっと前から分かった。自分に待ち人がいることを。目を
そらして気付かないフリしてただけで、その人の側にいたいと、
思わない日は無かったんだ。

このひと、だれ？

「…この、rightとlightの発音の違いですが、Rの方のライトは舌を巻いて、Lの方のライトは舌を上顎に付けるようにして発音します。他にもriceやplayなど、RとLでは全く違う意味になる言葉もありますので気を付けてください」

「あの、どうしても区別しないと駄目なんですか？」

「…ご飯の代わりにシラミ山盛り持つてこられなくては、気を付けた方が懸命です…」

留学と名の付くものは駅前でしか経験のないわたしが、まさか塾で英会話を教えることになるとは思わなかった。

サクマ先生が塾で教えているのは主に砲学と西洋学だから、教わりに来る生徒さんも外国に興味のある人が少なくない。そしてどこでその噂を耳にしたものか、赤坂に住む亀紫は西洋事情に詳しい、というデマをサクマ先生が信じてしまい、なんだかんだで2年ほど、塾で不定期の英語フランス語講座を開く生活を送っていた。

教科書なし、辞書なし、おまけに講師の最終学歴は小学校中退。それでもよければ誰でも受講OKという怪しすぎる授業など、よほどの物好きが変わり者しか参加しなかったが、それでも希望者は徐々に増えていったのだ。

…あの日から。

「待て、ムラサキ」

五月塾から帰ろうとすれば、必ずサクマ先生がわたしを呼び止める。次いで土郎さんに顎でしゃくると、彼は軽く頭を下げて門の外に出るのだ。

「まだ明るいですから、大丈夫ですよ」

「いーや女の独り歩きは油断できねえぞ。まさか一目で亀紫だと分かる奴はいねえと思うが、用心するに越したことはないからな」

こんな風に、いつも1人では帰らせてくれない。近頃は物騒になったからと、こうして塾に来るたびに土郎さんに送ってもらうよう、勧めてくる。

一緒にいられるのは嬉しいけど、なんだか毎回だと申し訳なくて、何度も一緒に歩いた帰り道、思い切って土郎さんに訊いてみた。

「…本当にいいんですか？ 1人だと危ないのはサクマ先生も一緒なんじゃ…」

土郎さんは視線を前から外さずに口許を緩めた。

「構わんだろう。先生がそうしろと仰るんだ。それに俺が居らずとも、護衛できる者は足りている。リンの字と違ってな」

最後しれっと付け加えられた皮肉な台詞に、わたしまで思わず含み笑いしてしまう。

リン太は身辺に男性を置いて使うことを好まない。壮士の護衛など置かずとも、女性のお手伝いさんだけで充分。どんな凶悪な人間もまさか婦人は手につかないだろうというのだ。よってわたしが町に1人で出ようが、サクマ先生ほど気にする様子もない。でもねえ。

（なんかモヤモヤしちゃうなあ）

「…気にするな」

ぽん、と軽い衝撃を頭部に感じた直後、大きな手のひらがそのままわたしの髪をぐちゃぐちゃに掻き回した。

「なにも奴は、お前が女だからと侮っているわけではない。たとえば襲われたとして辻斬りも女を狙うからには、男相手では歯が立たぬと踏んだ連中だろう」

うう…やっぱり見透かされてる。というか、いつまで経っても子供扱いされるわたしって…。

「その程度の輩ならば自分が守るまでもないと、お前の腕を信用しているだけだ」

「それって…慰めてます？」

「疑い深いな…」

「すつ、すみません！」

冗談だ、と破顔したあと、瞬時に真面目な顔に切り替えてわたしの

瞳を除きこんできた。

「それでも、なにかあったら俺を呼べ。必ず駆けつける」

「… 土郎さん…」

年甲斐もなくキュンとしたことは否定しない。思えば元の時代でもこの時代でも、こんな風は無償で甘やかしてくれる人はいなかったのだ。元の時代では誰もが期待を押し付けてきたし、こちらはこちらで子供扱いとも女の子扱いとも無縁だった。

こんな特別扱いを何気ない顔でしてくれるから、自分でも気づかぬうちに土郎さんを慕っていたのだろう。

でも、土郎さんの気持ちが分からない。

好意的に接してくれてるのは分かるけど、それが愛情からなのか、ただ単にわたしを気に入ってくれてるだけなのか。

… それとも、時を越えた仲間に対する同情でしかないのか…。

「ムラサキ？」

土郎さんの声にはっとして慌てて顔をあげると、つつかえ棒や張り紙が至るところにある小さい塾が見えてきた。リン太が開いている氷解塾だ。その少し手前に駕籠が停まっっていて、中から1人の男性が降り立った。

わたしは首をかしげた。わざわざ駕籠を使って来るなんて、どこの誰だろう。土郎さんを残して駆け寄ってみる。40歳ほどの、どこ

か威厳の漂う男性だった。

「…あの？」

わたしが声をかけると、男性はこちらを振り向いて目を細めた。

「お前は？」

「この塾の関係者です。…あの、あなたは」

「カツ殿を訪ねてきた。いるかね？」

「リン…カツはただいま外出しております。じきに戻るはずですが…ご伝言がございましたらお伺いします」

男性は細めた目に和やかな色を宿らせて軽く微笑んだ。この笑顔を見る限りじゃ悪い人ではなさそうだ。なさそう…なんだけど…。

「いや。折角だが、カツ殿と直接話がしたい。…私は大久保三市郎忠寛という。訪問の旨は前もって伝えてあるゆえ、ここで待たせて頂いてもよろしいだろうか」

なんか、この人お偉いさんオーラぶんぶんしてるんだけど、大丈夫なのかな？

とにもかくにも部屋にお通しして塾長に話を話し、土郎さんに頼んでリン太を呼び戻してもらうことにした。杉さんの応対がいつも以上に丁寧なところを見ると、どうやら最初の勘は当たったらしい。

「カツが不在のため塾長のわたくしが取り次ぎますこと、ひらにこ

容赦ください」

大久保さんは静かに頷いた。

「では、そちらのご婦人が亀紫だね。話には聞いているよ。西洋の事情に通じた、カツ殿の懐刀だそうじゃないか」

ちよつと待て、どこで聞いたのさその胡散臭い亀紫の噂は。それに懐刀と言われるほどの事はわたしもリン太もしてないぞ。

「もつとも、一風変わった蘭学者の噂は、かねてより耳にしていたのだけれどね」

噂？

と、大久保さんではなく杉さんに視線で問う。杉さんもやはりアイコンタクトで大久保さんの了解を得ると、良心的な小学校教師みたいな口ぶりで説明してくれた。

昔から「先生」と呼ばれる立場の人間は苦手だけど、この人になら先生面されるの、嫌じゃないんだよね。それはたぶん、わたしより年下だけど教師としての実力は、杉さんの方が明らかに上だから。

「ある藩から野戦砲の製造依頼があつて、そのときに鑄造師からの御神酒代を蹴ったことがあるんだ…これは？」

「…聞いたことない」

素直にそう言えば、杉さんは軽く頷く。

「野戦砲を作るには600両かかるんだが、そのうちの300両近くが携わった人間の取り分なんだね。つまり銅の原価に300両必要で、けれど本音を言ってしまうえば儲けは欲しい。そのため銅を減らすが目を見てほしいと、御神酒代として500両を渡した」

「つまり、賄賂ってこと？」

「そう。向こうにしてみればそれが慣例だろうから、俺に恥かかせるな！　って怒鳴られたら驚くだろうね」

『この大砲はナ、夷狄から日ノ本を護るため、ひいてはテメエ等を護るためのモノなんだ！　テメエも職人なら金出して変なモン作るより、その金で銅増やしてもっと良いモン作ってみろイ！』

「…アイツ得意のホラ話に尾ヒレがつけられたとか、そういう？」

「その可能性は大いにあるが」

わたしの皮肉に応えたのは杉さんでなく、大久保さんだった。

「明らかに作り話と分かる噂は、最初から誰も信じないだろうね。出来すぎた話が広まっているということは、良くも悪くもそれだけの人物だということだから。そうでなければ私も彼に興味は持たなかっただろう」

他はどうか知らないけど、リン太に限って言えばそれは買い被りすぎです大久保さん！　でも（たぶん）偉い人の話を遮る度胸なんてわたしは持ち合わせていない。

「もっとも、私と彼とはどこか近いものがありそうだというのが、

ここを訪ねた一番の理由だけどね——先日、浦賀に黒船が来て騒ぎになったのは覚えているだろう」

「黒船……」

この場合の黒船とはグラビアアイドルのことでも、大手ファーストフードチェーンのことでもない。文字通り真つ黒な船が4隻ほど、遥々アメリカ合衆国からやってきたのだ。

この時代の日本で交流がある地域は、オランダとシナ、朝鮮、琉球と蝦夷だけ。それをアメリカとも国交を結べと幕府に訴えてきたのだが、肝心の將軍サマは病の床。そこで親書だけ受け取り、返事は来年まで待ってくれと体よく追い返したというわけ。塾で英会話の受講希望者が増えたのは、たぶんそのせい。

「港を開いて燃料や食料も提供しろ、さもないと攻撃するという。しかし開国しなさいと言われて、ハイそうですかと簡単に言うわけにはいかない。そこで幕府は幕士や諸大名に始まり、学者や町民まで意見を広く募集した。その中にカツ殿の意見書があり、こうして直に話を聞かせてもらうことにしたんだ。……しかし」

切って、彼はまた面白げに笑う。

「なかなか帰ってこないな」

「……申し訳ありません……」

「いや、例の件で世間では攘夷論が活発になったからな。開国論者は勿論、西洋事情通というだけで危険が及ぶこともある」

知ってますよ。わたしも同じ理由で安全第一を口酸っぱく言われますから。

「事件に巻き込まれてないのならそれでいい、が…、…？」

入り口の向こうから声がかかる。顔を上げるとリン太が部屋に入ってくる場所だった。

いつもの癖で顰めっ面をつくり、遅いっ！！と言いかけたところで慌てて声を飲み込んだ。お客様の前でそんなことできるか。結果、なんとも表現しがたいビミョーな態度になってしまったわたしを、リン太は漫画でしか見ないようなドヤ顔で一瞥してくる。ム力つく奴だなおい。

その張り倒してやりたい顔を次の一瞬で引き締めると、ヤツは膝を折って深々と頭を下げた。

「ただいま戻りました。わたくしの不注意により長らくお待たせ致しましたこと、深くお詫び申し上げます。然したる持て成しも出来ませんが、どうぞごゆっくりお寛ぎ下さい」

伏せた顔から滲み出るオーラに、いつもの軽薄さは微塵も感じられなかった。……………って！

（えええ！？　ちょっと、ホントにこの人ダレ！？）

このひと、絶対タダ者じゃない。デリカシーの欠片も持ち合わせていないコイツに、礼儀を弁えさせるなんて。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8845t/>

董色の麒麟児

2011年11月4日11時10分発行